

# Alternative Systems Study Bulletin

第10巻第5号

(2002年12月20日)

## 現場から

研修会 独り言

15. ミードの自我論のポイント
16. ピアジェの発達心理学の基本的枠組
17. フロンの情動論の概要

## 心理学ノート (その1)

- A. ミードの自我論
- B. ピアジェの発達心理学
- C. 浜田寿美男のピアジェ批判
- D. フロンの情動論

## 実践的地域通貨論 (第1回)

西部忠さんのLETS研究によせて

## 後記

編集 境 毅

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169 号 貿易研究会

ホームページ <http://homepage1.nifty.com/office-ebara/>

メール [kyw04500@nifty.ne.jp](mailto:kyw04500@nifty.ne.jp)

会費 正会員 : 年間 1口 10万円

賛助会員 : 年間 1口 3万円

購読会員 : 年間 1口 1万円

振込先 口座名 : 資本論研究会

(郵便振替) 口座番号 : 01090-5-67283

## サポートセンター研修会 独り言

### 新しい思考

#### 15. ミードの自我論のポイント

心理学をテーマとした研修会で、もう、ミード、ピアジェ、ワロンについての講義を終えました。この間「独り言」は書いてこなかったの、まとめて書いておきましょう。まずミードの自我論について。

ミードは、1931年に亡くなった人ですが、生きていた間は論文は発表していますが、本にはまとめていません。いまあるのはミードの死後編集されたものです。ミードは、内観による心理分析を退け、自我は身体の属性ではなく社会的に形成されるものとみています。この社会的自我は、他者の態度を取得することによってなされる、というのです。

この他者の態度を取得する、という言い方は、一寸理解しにくいですが、この考え方は、アダム・スミスの『道徳感情論』から着想を得ていて、スミスの考えを知るとわかり易い。スミスは、人間が自分自身何であるかを知るには、他人を自分の鏡をすることが必要だと述べています。人間は一緒に生活している人たちの顔つきと振る舞いのなかにおかれていて、その顔つきと振る舞いが当事者の行動が困りに受け容れられているかどうかを示している。当事者はこのことを考慮することで、自分の行動の適宜性について知ることができる、というのです。

だから、ミードが他者の態度を取得する、というとき、それは自分が自分を見ている他者の態度に立って自分の行動を判定する、ということの意味しています。そして、この考え方にもとづいてミードは、社会的自我の形成を「一般化された他者」の態度を取得することに求め、そして、個々人がそうすることで、社会が成立すると見えています。

ミードが生きていた時代のアメリカは、ヨーロッパでの戦争で、経済的に潤い経済発展の黄金期でした。だからミードにとって、共同体や社会は、人間にとって非常に善いものであり、従って「一般化された他者」も善いものだと考えられていたのです。

ところが今日の社会システムは、その盛りを過ぎていて、この社会がもっている「一般化された他者」は、今日の若者たちにとっては非常に受け容れ難いものとなってしまっているのではないのでしょうか。その結果、若者が社会的自我を形成していくときに非常に苦勞する時代が訪れているのではないのでしょうか。

#### 16. ピアジェの発達心理学の基本的枠組

ピアジェについては、とりあげる予定はなかったのですが、たまたま『哲学の知恵と幻想』（みすず書房）を読んで面白かったので論文を書いてみました。もちろん膨大な著作をもつピアジェの全体像を研究することなど不可能ですから、ピアジェが「新しい思考」とかわりをもっているかどうか、という観点から切ってみるにすぎません。この論文を書いたあとで、浜田寿美男さんの業績について知り『ピアジェとワロン』（ミネルヴァ書房）を読んだことで、ワロンも講義することになりました。

ピアジェの発達論は非常に図式的で、これは多分、戦後の日本の教育システムのバックボーンとなった考え方のように思います。もっとも教育学にうとい私にとって論証することはできませんが、浜田さんも指摘しているように、ピアジェの発達論は、出発点の新生児からして個的な主体として捉えられていて、主体と外界とを媒介している活動を構造を構成していくものと捉える視点は面白いのですが、しかし、外界は死んだものと捉えられているので、結局、主体は個になっています。

私は、主体を個と捉え、個の発達を知能の発達過程として捉えて知を第一の価値とするピアジェの発達論にもとづいて教育システムが組まれたことで、今日のひきこもりの若者を生み出す状況がもし出されている様に思うようになりました。

なお、論文ではピアジェの発達論の基本的枠組が読み取りにくいので、浜田さんの説明を紹介して補足としておきましょう。

ピアジェの発達論は、1~2才までの感覚運動期、6~7才までの前操作期、10~11才までの具体的操作期、11~12才からの形式的操作期というように区分されていますが、この発達段階を説明する基本的枠組は、浜田さんによれば、シエマ、同化、調整という三つの概念です。

シエマは、一つのまとまりをもち、繰り返し可能な活動の単位であり、同化とは、外界を自分の手持ちのシエマに取り込む事で、そして調整とは、外部に合わせて手持ちのシエマを適切に修正していく事です。こうして、ピアジェの発達論は「一番最初の反射のシエマから、その多様化、協応、可動化、内心化を経て、表象シエマへ、さらに具体的概念シエマから形式的シエマへと、すべての知的行動の発達がシエマの展開として、つまりシエマを軸とする同化と調整の均衡化として説明される事になる。」(『ピアジェとワロン』115頁) というわけです。

#### 17. ワロンの情動論の概要

浜田さんによれば、ワロンの本は難解だし、それに訳書は訳の悪いものが多い、ということで、最初は『ピアジェとワロン』から、ワロンの説を紹介しようと考えていたのですが、久保田訳『児童における性格の起源』（明治図書）を読んでみると、非常にすっきりとした説が展開されていることがわかり、この本に沿って、ワロンの情動論の紹介をしました。

ワロンの発達論のキーワードは、姿勢、情動、自動作用、表象作用です。ワロンによれば、姿勢は静的緊張活動によるものだが、この点まったく内臓の働きと同様であり、そして情動は、一つの組織された反応体系で、その発現を支配する中枢を神経系の中に持つ、とみなされています。また、自動作用とは、新生児がもつばらそれに支配されている活動で、新生児の段階で既に完成されている内臓とそれに付随する諸器官の不随意的な活動であり、これに対して、表象作用とは、新生児には見られないもので、それは運動的適応や自動作用から生じるものではないとされています。

ピアジェが、新生児の活動を感覚運動と捉え、これから知覚が生じてくると見ているのに対して、ワロンは、新生児の自動作用や運動的適応からは直接的に表象作用を産み出せない、とみているのです。ではワロンは、表象作用がどのようにして生じると考えたのでしょうか。この点について、ワロンは、自動作用から表象作用への子供の思考の発展は、姿勢がもたらす情動という媒介の働きによる、としました。そして、いったん表象作用が形成されはじめると、子供の活動は、自動作用の支配下から表象作用の支配下へと移行する、というのです。

浜田さんも主張しているように、ワロンのこの考え方は、情動という共同的、社会的な感情を出発点に据えることで、人間の社会性、共同性を、個から出発するピアジェとちがって、うまく説明できるように思います。またワロンが情動に関心をもったのも、ナチズムがドイツを支配し母国フランスが占領された、という事と関係があるように思います。というのも、ヒトラーは、もつばら劣情に

訴えることで政治的支配を獲得したのですから。でも今日では、情動は、新しい文化の創造という見地から捉えることが出来、この見地からすれば、ワロンの業績は非常に有意義なものだと思います。

## 心理学ノート (その1) //

### A. ミードの自我論

#### 第1章 ミード自我論の概要

##### 1) 行動主義心理学

自分とは何か、心とは何か、という問をたてたとき、私たちは通常、自分の身体のいのちに属するものとしてこれらを捉えています。というも、死んでしまえば、自分も、心もなくなってしまうからです。

デカルトが「我思う、ゆえに我あり」と述べた自我論は、このような、自分を個人の身体に属するものと捉える考え方の基礎になっています。ところが、このような自我論に異議をとなえる考え方が、ミードによって提起されました。ミードはもちろん、自我が個人の身体に属するものであることを否定するわけではありませんが、それが社会的活動のなかで生成し、発展していくものであることを強調しているのです。

ミードの自我論からすれば、もっぱら内観に頼る心理学は成果を期待出来ないものと見なされます。ミードは人間の社会活動という行動にあらわれた諸現象を読み解くことで、人間の心理を解明していこうとしています。それは社会心理学の行動主義という立場です。ミードの『精神・自我・社会』(人間の科学社)に則して、自我論の概略を紹介してみましよう。

##### 2) 自我と身体の関係

自我と身体との関係について、ミードは次のように述べています。

「自我は、生誕のときからそこにあるのではなく、社会的経験と活動の過程のなかで生じるも

の、すなわち、全体としての過程に対する、及び、その過程のなかの他の諸個人に対する所与の個人の関係の結果として、彼のなかで発展するものなのである。」(170頁)

ここでミードが自我というとき、それを単なる意識をもった人間、という意味ではなく、自己意識をもった人間というように捉えている点に注意を促しておきましょう。人間は生まれたときから意識はもっていますが、自己意識をもつのはずっと後のことです。だから、ミードは、人間が成長していく過程で獲得していくものとして自我を捉え、そうすることで、自我というものの存在の様式について、社会活動を分析するという見地から追求しようとしているのです。

そこでミードは、人間の社会的行為についての次のような所見を大切にしています。

「合理的行為にとっては、個人がこのように、彼自身に対して客観的、没人格的態度を取るべきこと、個人が自分自身に対して対象になるべきことが必要になる。というのは、個別有機体は、明らかに、そのなかでその個別有機体が行動する経験的状況の本質的で、重要な事実、または構成要因だからである。個別有機体は、そのようなものとして自らを客観的なものと見なさない、知的に、または、合理的に行動できないのである。」(173~4頁)

ミードは、社会活動のなかでは、人間はたえず相手に合わせて、つまりは、自分を客観的な相手として対象的に扱うことで、合理的に行動できると考えています。「個人はこのように、

自分自身を直接的にではなく、間接的にのみ経験する」(174頁)というわけです。ここは一寸難しい論理ですが、個人が自我として社会のなかで行動しているときには、彼が自我の主体となっている(つまり、わがままにふるまう)のではなく、彼が所属する全体としての社会集団の一般化された観点から自分を規定しているのです。彼が主体としてふるまえるのは、彼が自分自身を彼に対して向けられた他の諸個人の態度を取得したものとして、自分を対象化することによってだ、というのです。

このような見地から、ミードはコミュニケーションについて、独特の位置づけを与えています。それは、コミュニケーションが「有機体または個人が彼自身によって対象になるような行動の形態を提供する」(174頁)からでした。

##### 3) 一般化された他者

ミードによれば、自我とは、ある個人にとって自分自身が対象になることによって生じるものであり、そして、言葉を話すことは相手の反応に反応していることですから、これこそが、自分にとって自分自身が対象になっている事態で自我の生成の場でした。そして、この場がコミュニケーションという行動形態です。

このようにコミュニケーションを捉えようと、人々はコミュニケーションしあうことで、そこにどのような社会的事態が起きているかについて知ることが可能となります。そのための手がかりとして、ミードはゲームを例に上げて、ゲームをすることが参加者の自我にどのような反応を引き起こすかについて考察しています。

「彼自身の行動の一つ一つは、そのゲームをしている他の選手の行動についての彼の想定によって決定される。彼のすることは、そのチームの他の誰かに彼になることで、少なくとも、それらの態度が彼自身の特殊な反応に影響を与える限りで制御されている。こうして、われわれは、同じ過程のなかに関わっているそれらの人々の態度の組織化である『他者』を獲得するのである。

個人には彼の自我の統一を与える組織化され

た共同体、または、社会集団は『一般化された他者』と呼ばれるだろう。一般化された他者への態度は、共同体全体の態度である。」(191~2頁)

ゲームに参加するとき、人はゲームのルールに従って行動し、自分の行動は他人の行動を考慮したうえで決められます。ここにはゲームに参加している全員の態度を組織化しているある「他者」があるが、それと同じように、共同体や社会集団にも「一般化された他者」とでも呼ぶべき人々の態度を組織化するものが見出されるとミードは考えています。この見地からミードは社会のなかで形成される自我について、次のように述べています。

「もし所与の人間個人が、十全な意味で自我を発展させようとするなら、彼は人間の社会過程のなかで、他の人間個人の彼自身および相互に向けられた態度を単に取得するだけでは不十分である。また、彼はそのような見地から、全体としてのこの社会過程を彼の個人的経験のなかに単に持ち込むだけでは不十分である。彼はまた、彼自身および相互に向けられた他の個人の態度を彼が取得するのと同じやり方で、組織化された社会または社会集団の成員として、彼らがすべて従事している共通の社会活動または社会事業の系列のさまざまな局面または側面に向けられた他の個人の態度を取得しなければならぬ。」(192頁)

ここでミードは、自我の形成にとって、単にコミュニケーションを通して相手の態度を自分が取得するにとどまらず、さらに「一般的他者」としてある他の個人の態度をも取得しなければならない、と述べています。

「一般化された他者の形態のなかで、社会過程は、そのなかに含まれ、それを遂行する個人の行動に影響を及ぼすのである。すなわち、共同体は、その個々の成員の行為に対する統制を行使するのである。というのは、このような形態において、社会過程ないし共同体は決定的要因として、個人の思考のなかに入るからである。抽象的思考にあつては、個人は、彼自身に向けられた一般化された他者の態度を、他の特殊な

個人におけるその表現に関係なく、取得する。具体的思考にあつては、彼は、所与の社会的状況または行動のなかに彼がいっしょに包含されている他の個人の彼の行動に向けられた態度のなかに、それが表現されている限りで、その態度を取得する。しかし、この二つの方法のどちらにおいても、彼自身に向けられた一般化された他者の態度を取得することによってのみ、彼は思考できるのである。」(193頁)

このようにミードは、ゲームのなかでの個人の態度から一般的他者を導き出し、それを社会関係にあてはめて社会を説明しています。この方法には違和感がありますが、しかし、社会のなかに一般的他者を発見したこと自体は異議があると思われず。

#### 4) 「I」と「me」

次に、ミードの自我論の中心的内容である「I」と「me」に移ります。自我を「I」と「me」との相互作用として捉えるミードは、それぞれについて次のように定義しています。

『I』は他者の態度にたいする有機体の反応であり、『me』は人が自ら想定する他者の態度の組織化された組み合わせである。他者の態度は、組織化された『me』を構成し、次に、人はその『me』に対して『I』として反作用する。」(215頁)

ミードは自我のなかに、一般的他者を取り込んで形成される「me」と、それに反応する個人の自我のうちにある「I」を区別し、この双方の反応を追うことで、自我の生成過程をあとづけようとしています。ここでもゲームやジェスチャー会話の例を引きながら、自我の二つの局面の相互作用を説き明かしているが、とりあえず、ミードが思考をどう捉えているか、という点と「I」と「me」との相互作用が社会の変化とどうかかわっていくか、という点について紹介しておくにとどめます。まず思考について。

『me』と『I』は思考の過程のなかに存在し、それを特徴づけているギブ・アンド・テイクの関係を示している。もし『me』がなければ、

われわれがその言葉を使用する意味での『I』は存在しない。『I』という形態での反応がなければ、『me』も存在しないだろう。この二つは、われわれの経験のなかに現われるときに、人格を構成する。われわれは、地理上のある地点に位置しているある国に、しかじかの家族関係、しかじかの政治的関係をもって生まれてきた個人である。これらすべては『me』を構成する特定の状況を表している。しかし、このことは必然的に、有機体はそれが存在する過程の内部で『me』に向けて、絶えず行動することを含意する。自我は、まず最初に存在し、次に他者との関係に入っていくなにかではなく、社会的潮流のなかにいわば渦巻きであり、したがって依然として社会的潮流の一部なのである。自我は、個人が不断に自らを自分の属している状況に前もって適応させ、状況にたいして反作用し返していく過程である。したがって、このような思考であり、意識的適応である「I」と「me」は、社会過程全体の部分になり、より高次に組織化された社会を可能にさせるのである。」(224～5頁)

ミードはここで、意識(思考)を自我と対象との関係と捉えたヘーゲルの意識論を土台とし、そして、自己意識(自我)について、ヘーゲルの精神現象学とは別の展開をしています。ヘーゲルの場合、一つの自己意識ともう一つの自己意識とが与えられたものとされ、双方の関係を通して、それぞれが自己意識として承認されていく仕組みを明らかにしたのでしたが、ミードはここでは自己意識を社会的行動における意識の二重性と捉えています。それが「I」と「me」で、この二つの局面の相互作用という見地から、人間の社会的行動について分析しようとしているのです。だから、社会の変化についても「I」と「me」の相互作用から説明されることになります。

『I』と『me』の両側面は、その十全な表現における自我にとって本質的である。人は、共同体に所属するために、集団のなかの他者の態度を取得しなければならない。彼は思考を進めるために、彼自身のなかに取り込まれた、外部

の社会的世界を用いなければならない。その共同体のなかで獲得された合理的な社会過程のおかげで、その共同体のなかの他者との関係を通して、彼は市民として存在するのである。一方、個人は常に、社会的態度に反作用し、この協同的過程のなかで、彼が所属している共同体を変えている。」(245～6頁)

階級闘争の理論が力をもっていた時代には、ミードのこのような考えは受け入れられなかったと思われず。というのも、この時代には社会は一般的他者としては存在せず、二大階級が

それぞれ正反対の一般的他者としてあらわれており、個人はどちらの陣営に属するかについて、迫られたからです。

でも階級への所属が不分明になってしまった今日、ミードのこの自我論は今日の個人と社会行動のかかわりを説明するのによく適しているように思われず。もっともそのまま適用できないでしょう。ミードにとっては、共同体から発せられる一般的他者は、基本的には善ですが、今日では社会から発せられる一般的他者は、どちらかと言えば嫌悪の対象ですから。

## 第2章 ミード自我論を超えて

### 1) 先行者スミス

以上、ミードの理論についてかいつまんで紹介してきました。次に検討に移りますが、その前に、ミードが参照したと言われている、アダム・スミスの『道徳感情論』(筑摩書房)をみてみましょう。スミスは『国富論』の著者として有名ですが、もともと法学も研究していて、最初の著作がこの本だったのです。この本の第三部、われわれ自身の諸感情と行動にかんする、われわれの判断の基礎について、および義務の感覚について、の第二篇で、スミスは次のように述べています。

「もし人間という被造物が、ある孤独な場所で、彼自身の種とのなんの交通もなしに成長して、成年に達することが可能であったとすれば、かれは、かれ自身の顔の美醜についてとおなじく、かれ自身の性格について、かれ自身の諸感情と行動の適宜性または欠陥について、かれ自身の精神の美醜について、考えることができないであろう。これらすべては、かれが容易にみることができず、かれが自然に注視することができず、それらにたいしてかれが目をむけることができるようにする鏡をあたえられていない、諸対象なのである。かれを社会のなかにつれてこよう。そうすればかれは、ただちに、かれがまえに欠如していた鏡をあたえられる。それは、かれが

ともに生活する人びとの、顔つきと振る舞いのなかにおかれるのであって、その顔つきと振る舞いはつねに、かれらがいつかれの諸感情のなかにはいりこむか、いつかれの諸感情を否認するかを、表示するのである。そしてここにおいてかれははじめて、かれ自身の諸情念の適宜性と不適宜性、かれ自身の精神の美醜を、眺めるのである。」(181～2頁)

このように、スミスは、社会の中で生活している他人を自分にとっての鏡だと見ています。この鏡はもちろん、ガラスの鏡のように自分の姿が直接映し出されるわけではないのですが、他人の表情や仕草で自分の行動についての評価がなされているのです。このように他人を鏡と捉えたときに問題は、この鏡がはたして正しい像を映し出せるかどうかという点にあります。この点について、スミスは次のように述べています。

「われわれ自身を、われわれが他人について判断するのとおなじように、判断すること、われわれが他人において是認あるいは非難するものを、われわれ自身については是認あるいは非難することは、公平さと中立性との、最大の行使である。このことをするために、われわれは自分たちを、他の人びとをみるのとおなじ目で、見つめなければならない。すなわち、われわれは、自分たちがわれわれ自身の性格と行動の、

行為者ではなく観察者であると、想像しなければならず、これらの性格と行動が、この新しい立場から見られた場合に、どのようにわれわれに作用するであろうかを、考察しなければならない。この立場においてのみ、それらのものの卓越性と不完全性が発見されるのである。ようするにわれわれは、われわれの行動について喝采または非難をなすうるためには、他の人びとの現実の感情、または、他の人びとのそうあるべき感情、またはその行動のすべての事情が知られるならばそうなるだろうとわれわれが想像する他の人びとの感情に、はいりこまなければならないのである。」(183頁)

スミス自身、このような自分の行為を観察者の目で見ることの困難さを知っており、どのようにして人がそれに従うべき一般的規則が生まれてくるかを問題にしているのですが、それについてはここではこれ以上追求することはやめておきます。ここでは、スミスの思想のミードへの影響を見ることに限定しましょう。そうすると、ミードの「I」と「me」についても、スミスに萌芽的な展開がみられます。

「わたくしが、自分自身の行動を検査しようと努力するとき、わたくしが、それに対して判決をくだしてそれを是認または非難しようと努力するとき、つぎのことはあきらかである。すなわち、すべてそのようなばあいには、わたくしはいわば自分をふたりの人物に分割するのだということ、そして検査官であり裁判官であるわたくしは、自分の行動が検査され裁判される人物である、他方のわたくしとは、ちがった性格をあらわすものだという事である。前者は観察者であって、わたくしは自分をかれの境遇におくことによって、またその特殊な観点から見られたばあいに、自分の行動がわたくしにどう見えるであろうかを考察することによって、わたくし自身の行動についてのかれの諸感情に、はいりこもうと努力する。」(194頁)

スミスはこのように述べたあと、裁判官があらゆる点で被告と同一であるということは不可能である、と述べて、この二人の人物への自分の分割を道徳論の基礎づけとしては無理がある

ことを認めています。いまここで問題は、スミスが、個人の公私の分裂を認め、さらに、自分が他人の感情のなかにははいりこむ、ということが、実は自分の行動が観察者としての他人にどう見えるかということと考察することによって自分の行動についての他人の諸感情を獲得することであることが示されていることです。

さて、これまでに引用したスミスの思想にふれると、ミードの言っていることがよくわかると思いませんか。ミードが自分が自分の対象になる、と言い、また、他者の態度を取得する、と言っていることは、スミスが言うように、行動する自分を裁判官の目で判定することだったので、スミスはこれを無理だと見ていたのに、ミードは「一般化された他者」を導入することで、これが社会的生活のなかで日常的に成立し、そして、その帰結として自我が生じると見えています。

## 2) 先行者デュルケム

ミードの先行者とみなされているもう一人の人物は、社会学者のデュルケムです。デュルケムは社会学の対象としてある社会的事実について、それを人々の意のままにならない「物」のようなものとして捉えることを提案しました。つまり、社会には、「個々人の意識の外部に存在するという顕著な属性を示すところの行動、思考、および感覚の諸様式がみとめられ」(『社会学的方法の基準』岩波文庫、52頁)そして「これらの行為や思考の型は、たんに、個人に外在するばかりでなく、個人の欲すると否とにかかわらずかれに影響をおよぼしてくるような、ある命令と強制の力を付与されている」(52頁)というのです。

デュルケムによれば、この一群の事実は、表象や行為から成っている、という意味で単なる生命活動とはみなせないし、また、個人の意識の内部に、あるいは個人意識としてある心理的現象としてもみなせず、端的に社会的事実と規定する他はないのです。社会的事実については次のように定義されます。

「社会的事実とは、固定化されていると否とを

問わず、個人のうえに外部的な拘束をおよぼすことができ、さらにいえば、固有の存在をもちながら所与の社会の範囲内に一般的にひろがり、その個人的な表現物からは独立しているいっさいの行動様式のことである。」(69頁)

このような定義にもとづいて晩年のデュルケムは宗教を研究し、『宗教生活の原初形態』(岩波文庫)を書きました。その結論部分で、「ほとんどすべての主要な社会的制度は宗教から生まれたと述べている」(下、327頁)と述べたデュルケムは、概念を集合的表象であるとして、次のように展開しています。

「概念が万人に共通なのは、それが共同社会の作品だからである。概念が、何も特殊な知能の刻印をおびていないのは、あらゆる他の概念が出会い、いわば、扶養し合うユニークな知能によって、それが精練されているからである。感覚または心象よりも堅固さをもっているのは、集合的表象が個人的表象よりさらに堅固だからである。なぜなら、個人はその内的または外的環境に生じる微弱な変化に対してさえ敏感であるが、十分に重大な事象のみが社会の心的基礎に影響を及ぼすことに成功しうからである。特殊な意志または知能に一致して課せられる思考または行動の『類型』にわれわれが直面するたびごとに、個人に及ぼされたこの抑圧は、集合体の公在を現すのである。なお、また、われわれが、現在、それらによって思考している諸概念は、語累の中に記入されたものであることを、さきに述べておいた。ところで、疑いもなく、言語、ひいては、これが表現する概念の体系は、集合的洗練の所産である。それが表現するものは、社会が総体において経験の対象を表象する様式である。したがって、語のさまざまな要素に対応する観念は、集合的表象である。」(下、353~4頁)

ミードの一般的他者は、デュルケムの集合的表象とは異なって個人の自我のうちにある要素「me」との関連で捉えられています。この意味ではミードの説はスミスの個人の分裂としての観察者の方に近いように思われます。これに対して、デュルケムの集合的表象の場合、それ

が「各個人の意識の内容を無限に超過している」(下、366頁)という点が強調されているのです。もちろんデュルケムも集合的表象が「主観的要素を含んでいる」(下、371頁)ことを認めてはいるのですが、社会的事象についての自らの定義にとらわれて、それが個人の外にある物的存在として捉えられ、それが歴史的にどのように形成されたか、という観点に問題意識を集中させてしまっているのです。

## 3) 19世紀の思想運動

ミードの自我論の検討に移る前に、ミードが『十九世紀の思想運動』(人間の科学社)で述べているガリレオからヘーゲルに到る自我論の発達をあとづけているところに注目してみましょう。以下はミードの要約です。

ミードは、ガリレオが世界を解説する言語が数学的言語であることを発見したこと(「自然という書物は数学の言語によって書かれている」)から科学思想の発展過程をあとづけています。デカルトにあつては明白さと明確さが真理の基準で、蓋然性については科学とは認められていませんでした。この見地から、デカルトは「われ思う、ゆえに我あり」を自我の存立の根拠としたのでした。

この自我論とは別に、ホッブスやロックやルソーによって、社会と国家についての科学的説明がなされ始めます。ルソーは個人の意識の外にある「一般的意思」として自由や平等や博愛を根拠づけました。

そのあと、ヒュームの懐疑論が登場します。ヒュームは知識が全て印象と経験が組織されたものにしかすぎないように見える点に注目し、確実なものは因果関係だけとみなしました。そして因果関係の法則とは、過去において相互に継続しあっていた事物が、これからも継続することを期待する、という人間の本性のことでした。このような見地からすれば、自我も印象と経験の集合ということになります。

このヒュームの懐疑を批判したのが、カントでした。ヒュームにあつては、印象と観念から始めて、それらの外部に存在し、それらの原因

と見なされる対象に到る道がなく、主観的世界から外部にあるものにいたる通路が破壊されている。このようなヒュームの考えに対し、カントは、精神自体に一定の形式があるとし、精神こそが自然に法則を与えるとみなすことで、対象から精神に、経験を通じて印象がもたらされるという、ヒュームも含めてそれまでの哲学者が前提にしてきた思想を、まさにコペルニクス的に転換させたのでした。

ところで、このようにして成立したカントの思想によれば、自然に対して精神が自らの形式でもって法則を与えるとき、自然自体には剰余が残ることになります。だからカントは物自体は認識しえないと述べたのでした。ここからカントの自我論は、一方では精神に属する純粋に形式的なものであり、他方では物自体である、というように分裂したものとなります。

このカントの自我論を克服しようとしたのが、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルと続くドイツ観念論のロマン主義でした。ロマン主義は、主客の合一をとらえ（その先駆けはスピノザとライプニッツにあります）、知識の対象と知識の過程そのものを同一化し、その同一性が自我のうちにある限りで見出されるものを論理として展開したのでした。そのポイントはミードによれば、人は他者の役割を取得することによって、自分自身に立ち返ることができ、また自分自身を所与の知識対象として保証することができる、というところにありました。デカルトの自我には非我は含まれていませんでしたが、ロマン主義にあつては、私が意識している自我とともに、自我の知る対象が存在することが認められているのです。

ところでガリレオから始めたミードが何故自我論にこだわっているかと言えば、科学的方法自体が自我の発達によってもたらされたものだ、という認識があるからです。「私が指摘したいのは、科学的方法そのものは、結局のところ、自己意識にいたった進化過程に他ならない」（411頁）とミードは述べています。そして、ヘーゲルの自我論を乗り越えたものとして、ミードは自らの自我論を次のようにまとめていま

す。「もし個人がこうした態度を身振りによって、また、他者に与えるのと同じ効果を自分自身にも与える言葉によって、他者のなかかに呼び起こすなら、そのとき彼は他者のなかかに呼び起こすのと同じ態度を自分自身のなかにも呼び起こすことになる。こうして、個人は、他者がかれに働きかけてくるのと同じように、自分を訓戒する。すなわち、個人は自分の権利が何であるかを認識すると同時に、自分の義務が何であるかも認識するようになる。個人は、彼自身に向けている共同体の態度を取得する。」（425～6頁）

ミードの自我論は、個人がいかんにして共同体の態度を取得するか、ということ、個人が他者とのコミュニケーションにおいて意識を二重化させることで他者の態度を取得することに求め、そして、このような自我の成立と進化が、科学的方法を生み出した、というように、社会の進化を捉える際の基本的視点とされています。

#### 4) 自我論の新展開へ

ミードの自我論は、内観による心理学に成果を期待しない点で正しいのですが、「一般化された他者」自体がどのようにして成立するかについては明らかにできていません。ミードがスミスに習って、個人の人格の二重化を「I」と「me」に区分したとき、「一般化された他者」は、はじめから前提にされているのです。だから、個人が「一般化された他者」の態度を取得することについては、ゲームの例から類推することで説明しています。

次に「一般化された他者」の態度とは、結局は共同体の態度なのですが、ミードはこれを固定したものとは捉えず、たえず変動していくものと捉え、そして、その変動を「I」と「me」との間の相互作用から説明しようとしています。

双方とも興味深い試みですが、しかし、十分な説得力をもていないように思います。私はミードがここまで問題を追求してきたのなら、「一般化された他者」が、コミュニケーション過程（一定の社会関係）でどのように生成する

かについて解明する他はなかったと考えたい。

そうすると、個人が他者との間に何らかの社会関係をもとうとするとき、社会関係が「一般化された他者」を生成する場として機能していることを解き明かす必要に迫られます。スミスの言う人間鏡の場合、個人Aが他者Bのふりを見て自分のふるまいを点検するわけですが、その時Aの鏡にされているBは、生身の人間のままで「一般化された他者」として現われています。だから、ミードの言う「I」と「me」は、鏡にされているBにとっては、「I」は「me」の化身とされていて、その結果Aは「一般化された他者」の態度を取得していきける、というこ

## B. ピアジェの発達心理学

### 1) 哲学とは知恵だ

発達心理学の大家、ピアジェの『哲学の知恵と幻想』（みすず書房）は一風変わった本だ。もともと哲学の研究を目指し、そして、哲学の講座も担当し、哲学に詳しいピアジェは、子供の頃の生物研究で身につけた独自の方法論に導かれて、人間の精神の発達を、子供を素材とし、実験と演繹によって、認識がどのように発達していくかを明らかにして発生的認識論の立場を築いた。そのあと、この自称科学的心理学の見地から、心理学についてたえず形而上学の高みから介入しようとしてくる哲学に対して、うるさいハエを追うような姿勢で書かれたのがこの本である。

ピアジェの哲学に対する評価は、序論に書かれている次の一句でついている。

「哲学とは、その偉大な名声にふさわしく、人間の諸活動を調整するために、理性的存在にとって不可欠な『知恵』である。だが『認識』とよばれるものの根本条件たる確証や様式をそなえた『知』には到っていない。」（1頁）

このようなピアジェの哲学に対する評価の裏側には、当然にも「知恵」が個人的な認識に属

とではないでしょうか。

そして次にAとBとの関係を転倒させると、今度はAは「I」としての役割を消失させられ、もっぱら「me」としてふるまうことを強制される、ということになります。つまり、社会関係のなかでの「一般化された他者」の生成は、個人が社会から見られることで自己がそのように振る舞わざるを得ないという、ある種の社会的な力のもたらすものであり、ミードの考えているような、あらかじめ出来上がっている「一般化された他者」の態度を個人が取得するといったことではないことになります。

するものであるのに対し、「知」とは科学的認識によってつくられるもので、それは実験による再現性をはじめとする、他人による検証可能なもの、という科学観がある。ピアジェによれば「知恵」とは理性に基づいた信念で、知識ではないのであり、そして、哲学も科学も領域における差はないものの、科学的認識が進んでいる固有の領域には哲学の出番はなく、まだ科学的認識が進んでいない領域にその活動の場を限定すべき、ということなのだ。

このようなピアジェの哲学批判も、本人は自覚していないが、実はある種の哲学になっている、ということはさておき、ピアジェが哲学を一人一説の世界だと考えている点には大いに同意したい。そして、哲学が想定する真理と、科学が想定する真理とは異なっている、というピアジェの考えも正しい。だからといって、科学が想定する真理の前に哲学の出番はないと言われると疑問が残る。もちろん思慮深いピアジェのことだから、科学の固有の領域への哲学の介入を一律に拒否しているわけではない。科学が倫理的問題を起こしている時には、哲学の介入を認めている（205頁）。もしピアジェが今日生きておれば、「科学の知識と幻想」とでも題

する科学批判の本を書いたかも知れない。というのも、今日の先端の科学知識は、ほとんどのものが、倫理の問題にかかわっているからだ。

## 2) ピアジェの方法論

さて、ピアジェ自身述べているように、彼の哲学批判の根底にある発生的認識論の土台となっているものは、子供の頃に生物を観察することで得られた考え方だった。これについてピアジェは次のように述べている。

「わたくしは、わたくしの見地にとって中心的な二つの考えに達した。わたくしは、その時以来、決して、その考えを棄てなかったのである。第一の考えは、すべての生物が、不変の構造——その構造は、環境の影響の下に変わることはあるが、決して全体構造として、破壊されることはない——をもっていて、すべての認識とは、常に、外部の所与を主体の構造に同化することである、という考えである。第二の考えは、思考の模範的な要因が、生物学的には、自己調整による均衡の必然性に対応するという考えである。だから論理学は、主体においては、均衡過程に対応し得るわけである。」(14頁)

この引用だけだと、ピアジェが構造を静的なものとして見ていたように受け止められるので、『発生的認識論』(白水社)からの引用も付加しておこう。

「わたくしの中心問題は、新しい構造のたえざる形成という問題だからであり、この構造は、その発達に先立つ諸段階の過程で、あらかじめ環境の中でつくられるものでもないし、主体自体の内部でつくられるものでもないのである。」(発生的、78-9頁)

いわゆる構成主義といわれる立場である。ところで、発生的認識論については大部の『発生的認識論・序説』(三省堂)があり、第1巻では数学思想、第2巻では物理学思想、第3巻では生物学思想がそれぞれあつかわれ、発生的認識論の立場からの認識の発展論が個別に展開されている。こんなものはとても手に負えないので、クセジュの一冊の方で、50頁強にまとめられているのを見てみると、種々の認識の分類

の上に、自身が提示した児童心理学での精神の発達論からの法則的な見地で無理やり整理したようなもので、まず面白くないし、次に決定的なことだが、人間の認識能力を高めるという実践にとっての効用がありそうにない。

そういうわけで、結局は、ピアジェの専門分野である児童心理学の部分しか、真面目に検討するに値しないと思われる。

## 3) 主体と客体との中間の

### 相互作用としての活動

ピアジェの『発生的認識論』(白水社)第一章、認識の形成に則して、ピアジェが強調しているところを見てみよう。まずピアジェは認識の古典的立場を、認識の全ての情報が客体から発し、外側から主体に知らせにやってくるのか、それとも逆に、生得説がいうように、主体は最初から、客体に課する内生的構造を身につけているかどうか、というようにわけた上で、精神発達の分析はこれらの前提に矛盾しているとし、次のように述べている。

「認識は、その起源では自分自身を意識している主体から生じるのではなく、主体に課せられるところのすでに構成された客体から生じるでもない。認識は、主体と客体との中間に生じる相互作用、したがって、同時に両方に属している相互作用から生じるのだ。しかし、それは、はっきりとした形のもの同士の相互交渉によるのではなく、完全に未分化であることによるのである。他方、したがって、最初は言葉の認識論的意味での主体も、あるがままだとみなされる客体も、とくに相互作用の不変な道具も存在していないとするならば、認識の最初の問題は、こういった媒体をつくることの問題であろう。この場合、それらの媒体は、自分自身の身体と事物との接触の領域から出発して、外部からと内部からの二つの相補的な方向に、しだいに前進しつつ入り込むことになる。主体と客体とが密接に結びついて完成されるのは、媒体がこの二つの方向にしだいに構成されていくことに依存しているのである。」(18-9頁)

ヘーゲルは、意識一般を自我と対象(自我も含む)との関係と捉え、これを研究する学問として哲学を位置づけていたが、それと同様の発想がここに見られる。もちろん、ピアジェの場合、中間にあるものは意識一般ではなく、それも含んだところのものであり、「知覚よりもはるかに大きな柔軟性をもつ活動そのもの」

(19頁)とされている。そして乳児を研究対象とすることで、この活動を認識の発達という観点から調べあげ、それが一つの構造へと形成されていく過程をえがき出そうとしたのであった。

## 4) ピアジェの発達論

まず、ピアジェの結論を紹介しておく方がわかりやすい。生まれてから14~5才に到るまでの子供の認識の発達について述べる際に、ピアジェは言葉が話すようになる時期(2才)で大きく二つに区分し、そして前半を感覚運動期、後半を操作期と呼び、さらにそれぞれを三段階に分けている。

そこで、生まれたすぐの感覚運動的段階について、ピアジェは、乳児の場合は、内界と外界との境界があいまいになっていると考え、次のように述べている。

「主体も客体も含まれていない実在の構造の中では、のちになって主体となるものと客体となるものとの間の唯一の可能な結びつきが活動によってつくられることは、明らかである。しかし、それは特殊な型の活動なのであって、その認識論的意味は、教えられる点が多いように思われる。じっさい乳児は、空間の領域でも、構成されつつあるさまざまな知覚器官の及ぶ範囲でも、あたかも世界の中心であるかのように、すべてを自分の身体に向ける。しかしその中心は認識されていないのである。いかえれば、原初的活動は、主体的なものと客体的なものとの間が完全に未分化であると同時に、基本的に中心化されている——その中心化が、この未分化にむすびついているので、根本的に無意識的なものであるとはいえ——ことを示している。」(21頁)

原初的活動についてのこのような捉え方はなかなか面白い。主体と客体との未分化と結びついた中心化として特徴づけられたこの原初的活動は、言葉を使うようになると一種のコペルニクスの転回が遂行される、という。

「活動を自分の身体から脱中心化すること、自分の身体をほかの客体の中の一つの客体として、それらすべてを含む空間内で、みなすこと、および自分を運動の起源または支配者としてさえ認識しはじめている主体の共応効果のもとに客体の諸作用を結びつけることから成っている。じっさい、まず、感覚運動的時期の相次ぐ段階において、活動の漸次的共応がみられる。これらの活動はそれぞれ、それ自体の上に閉じ込められた小さな全体をつくりつづけるかわりに、相互同化という基本的なはたらきによって、手段と目標との結合——これは本来の意味での知能行為を特徴づけるものだ——をつくるにいたるまで、ある程度すみやかに、相互に共応することができる。このとき、主体は自分を、活動の起源としつつ、したがって、認識の起源として構成する。」(23頁)

ピアジェの発達論は、活動における変化をたどることに重点がおかれている。そしてこの活動は認識構造を構成していく主体的な働きである。この働きについてピアジェは共応と同化という生命体に共通に見られる活動の内容から出発している。生まれたばかりの乳児の活動は不共応であり、かつ主客が未分化であるが、活動自体に本源的にそなわっている共応が働きはじめ、活動は主体による客体の同化という構造をもつにいたる、というわけだ。

「活動相互の発生期における共応のおかげで、主体と対象とが、それらの相互作用の道具を仕上げながら分化し合いはじめるやいなや、認識の論理、数学的な極と物理的な極との両極を伴って、認識がつくられるのだ。」(28頁)

このように主張するピアジェの発達論は、操作期に入るととたんに形而上学的になる。ピアジェが実験の対象とした子供の両親は、学校教育を受けており、また操作期の子供自体、学校に通っている。だから、認識の論理数学的な極

と物理的な極をもつ認識構造が子供に見出されることになるのは当たり前であるが、しかし、これは発生的認識論という立場からすれば、ルール違反をおかしているように思われる。はたして、中世の農民の子供に、このような認識構造を発見しうるのだろうか。ピアジェの考えている認識構造がもし存在するとすれば、それ自体歴史的にたえず変化しているものでしかありえない。ピアジェが実験した時代には、数学や物理学が学校教育で教えられていたからこそ、ピアジェの主張する認識構造を子供が形成したのだ。この意味でピアジェの発達心理学の独自性は感覚運動的時期の研究のところにしかないように思われる。

### 5) ピアジェの構造論

ピアジェの発達論の感覚運動的時期の活動論を見たらうえにたつて、次には独自の構造論をとりあげよう。テキストは『構造主義』(白水社)である。

ピアジェは自らの構造論を主体がある構成主義的なものと主張することで、フーコーなどの主体なき構造主義との区別を行っている。

ピアジェは構造という概念で、人間の構造とか、認識の構造とか、論理構造とか、多様に使っている。一つのまとまりある全体、といったイメージなのだが、ピアジェはそこに「全体性と変換と自己制御」(15頁)という三つの性格を見出している。ピアジェが中心的に問題にしているのは認識構造であるが、それを検討する前に、生物を例にした構造の説明が与えられているので、それを引用しておこう。

「構造の形式化へとみちびく(言葉の生物学的意味での)本質機能は<同化>の機能である。わたくしは、非構造主義者の理論の原子論的図式に固有の<連合>の機能の代わりに、この同化の機能をおきかえた。じっさい、同化はシエマを生み出す。したがって、構造を生み出す。生物学的見地からみると、生活体は、環境の物体またはエネルギーとの相互作用をおこなうたびに、場面に調節すると同時に、自分自身の構造に、環境の物体やエネルギーを同化する。だ

から同化は、生物体の形態の永続性と連続性の要因なのである。……同化は、たえざる関係づけと対応づけの源泉であり、<適用>などの源泉でもある。そして概念的表象の面では、同化は、構造という一般的シエマに達する。しかし同化は構造ではない。それは、構造の構成的機能的側面にすぎない。」(77頁)

ここでピアジェが「シエマ」と述べているものは、自分のうちの行動図式のことである。ピアジェは主体と客体の間にある媒体としての活動が一定の構造へとシエマ化されていく際の機能を同化とみている。同化は構造そのものではないが、構造を構成していく機能と捉えられている。

### 6) 構造の構成論

さて、ピアジェの認識構造論がかかえている中心問題は、発達途上の主体がどのようにして論理的数学的構造を獲得しようとしているかを説明するのか(68頁)ということだった。この点についてピアジェは、幼児を対象とした実験から、次のように述べている。

「ところで、観察と実験とが、もっともはっきりとめしているように、論理的構造は、構成されるものであり、しかも、それが仕上げられるには12年間たつぷりかかりさえる。だが、この構成は、何らかの学習法則ではない特殊な法則に従っている。すなわち、欲求に応じて構成の素材を提供する反省的抽象と、構造の内的な可逆的体制化を提供する自己制御の意味での均衡化という、二重の働きのおかげで、構造は、それらの構成そのものにより、必然性に達する。」(68-9頁)

ここで反省的抽象と呼ばれているのは、主体も客体も区別されてはいなかった原初的活動(相互的不共応)から出発し、活動の漸次的共応をへて、主体が自分を活動の起源として、したがって、認識の起源として構成することで、相互同化が可能となり、対象相互の関係を空間的、時間的構造として捉えるとともに、主体の活動を相互に結びつけられるようになる、という二種類の共応構造のあとに形成される内面化

された活動のことである。そして、このレベルに達した認識構造は、この反省的抽象の働きと一体となって、構造の可逆的な体制化(つまりは構造のつくりかえ)をつくり出す自己制御の意味での均等化が働き、論理的構成が必然化される、というのである。この反省的抽象と均衡化という二重の働きについて具体的には次のように説明されている。

「ところで、根が生得的で、分化が習得的であるようなこれらすべての行動の中に、ある種の機能的要因とある種の共通な構造的要素とがみいだされる。機能的要因とは、同化、つまり、行為が能動的にくりかえされ、新しい対象を統合する過程(たとえば、哺乳のシエマの中に統合されているおやゆびしゃぶりなど)と、多様な対象への同化のシエマの調節である。構造的要素は、何よりも、ある種の順応関係(反射における運動の順序、習慣の運動の順序、追求される手段と目標との結びつきにおける運動の順応など)、と分類(把握することのような単純なシエマを、引っ張ることのようなより複雑なほかのシエマに従属させること)と(再認的同化などにおける)対応づけとである。」(69-70頁)

ピアジェによれば、順応関係、分類、対応づけが共通な構造的な要因で、これらで構成されている構造において、同化という機能的要因が働いて、構造を変動させつつそれを均衡化の働きで再体制化する、という。そして前者は反省的抽象とかかわり、後者は均衡化とかかわっているようだ。だから、ピアジェは端的に次のように述べている。

「ところで構造を分析するとき、そのすべての要素を提供する反省的抽象と、操作の可逆性の源泉である均衡化との二つの働きによって、その構造が、すべて以前の構造から生じることを容易にみとめることができる。だから、ここでは、一步一步、真の構造が構成されていくのが、みられるのだ。なぜならその構造は、すでに

論理的だからである。」(72-3頁)

以上がピアジェの構造の構成論の概略である。

### 7) とりあえずの疑問

ピアジェの発達論が個体から出発していて、社会関係が考慮されていない、という点については、同時代人のワロンが指摘していた。発達論については、ピアジェの具体的な研究報告を検討せずにあれこれ意見を述べるわけにはいかないで、ここでは構造論についての疑問を述べておこう。

ピアジェが、主体と客体との中間にあるものとしての活動に注目し、それを構造として捉えようとしたこと自体は意義のある試みだった。ただピアジェにあつては、この構造は、いったん形成されてしまうと、そこから出られないようなものとして想定されている。全体性、変換性、自己制御の三つの基本性格を与えられることで、ピアジェの構造は主体の活動がそこから抜け出せない枠組みになってしまっている。

しかし、活動を構造として捉えようとするとき、活動そのものがたえず構造をつくり出している、という見地が大切ではなからうか。このように考えると、人間の社会は、活動の構造につきるものではなく、過去の活動、つまり対象化された活動が蓄積されている、ということが判明する。ピアジェは活動というとき、この過去の活動を含めていない。ワロンがピアジェの発達論に社会性の欠如を指摘したのも、このこととかかわっているのではなからうか。というのも、社会とは、過去の間活動の蓄積に他ならないのだから。新生児は社会の中に産み落とされることで、ピアジェが対象としている母親との間に成立する活動だけでなく、親を通して過去の人間活動の蓄積とも出会っているのではなからうか。



## C. 浜田寿美男のピアジェ批判

### 1) ピアジェの基本的枠組

浜田寿美男は『ピアジェとワロン』（ミネルヴァ書房）で、ピアジェとの対比でワロンの発達論を高く評価している。浜田の本の第1部 ピアジェの世界で述べられているピアジェ批判を紹介しよう。浜田は、第1章ピアジェにおける認知発達論で、ピアジェの『知能の発達』を軸にして、ピアジェの発達論を批判的に紹介し、ついで、第2章ピアジェにおける情意発達論で、従来あまり検討されなかつたピアジェの情意発達論について詳しく紹介し、コメントしている。その上で、第3章ピアジェの発達論は何をどこまで捉えたか、では、ピアジェ発達論のキー概念となっている「シエマ」と「適応」についての批判が試みられている。ピアジェの後期の発達論と構造論についてはすでに紹介してきたので、ここでは、第3章に則して、浜田のピアジェ批判を追ってみよう。

浜田は、この章ではピアジェが展開してきた発達論の土俵そのものを検討しようとしている。浜田によれば、ピアジェの理論は、「現代の科学技術文明のイデオロギーを見事に反映していると同時に、逆にそのイデオロギーを強化する働きをもっている」（109頁）ので、その相対化が必要であり、「彼の理論をその正当な評価のもとに位置づけ、彼が一体なにを捉え、なにを捉えなかつたかを考える」（109頁）ことが目指されるべきとされている。

それで、もともとピアジェの研究の目標は認識論にあり、彼が人間という現象の全体から認知的、知性的な側面のみを取り出して論じることになっているが、浜田はこのこと自体は当然の方法だと認めた上で、「問題は、彼がその認知や知性を人間現象全体から正しく取り出し得ているかどうか、あるいは取り出してきた認知や知性を人間現象全体のなかに正しく位置づけているかどうか」（111頁）というところにあると述べている。

このような問題意識から、浜田は、ピアジェ理論の基本的枠組となっているシエマと、その同化と調整という考え方の批判的検討を行っている。浜田は、ピアジェが、適応を生体と環境との相互作用の過程と捉えていることを評価している。その上で、その相互作用のあり方が、同化—調節の理論で捉えられていることに批判のメスを入れる。

ピアジェにあつては「シエマとは、ひとつのまとまりをもち、繰り返し可能な活動の単位」（113頁）であるが、子供は手持ちのシエマを用いて、繰り返し身の周りの世界を捉え働きかけているのであるが、このときに「外界を自分の手持ちのシエマに取り込むこと」（113頁）がピアジェの同化なのだ浜田は見ている。そして手持ちのシエマだけでは外界に対応できないので「外部に合わせて手持ちのシエマを適切に修正していくこと」（113頁）が調節と捉えられている、というのだ。

シエマ及びその同化と調節という枠組から組み立てられたピアジェの発達論について、浜田は大略次のように述べている。

「同じひとつのシエマが、周囲の様々な事物と関わり、次々に新しいシエマが生まれ出され、主体のもつシエマが多様化していくが、ある時期がくると、それまで独立していたシエマどうしが協応して、ある目的に向けて手段を講ずるといふ、いわば知覚的行動があらわれ、多種多様なシエマが、いろいろな文脈のなかで用いられるようになる。これがシエマの可動化で、やがてシエマ自体は個々の具体的な文脈を離れた独立の働きとなり、それによってシエマは心内化していく。シエマはもはや具体的な身体行動としてあらわれることなく、心内的な機能として働くようになり、表象が成立する。次にこの表象が多様化し、表象どうしが協応し、表象の世界が体制としてまとまることによって概念が形成され、さらにこの具体物に関する概念は、概念どうしの協応をへて抽象的な概念へと到る。」

（114頁）

「このようにして、一番最初の反射のシエマから、この多様化、協応、可動化、心内化をへて、表象シエマへ、さらに具体的概念シエマから形式的概念シエマへと、すべての知的行動の発達が、シエマの展開として、つまりシエマを軸とする同化と調節の均衡化として説明されることになる。」（115頁）

そして、この同化と調節は、主体と環境との相互作用であつて、生命維持的な適応機能から人間的な高次の知的機能までいたるすべての機能がこの概念によって捉えられているというのが、浜田によるピアジェ発達論の基本的枠組だつた。

### 2) 基本的枠組の批判

ピアジェのこの基本的枠組に対して、浜田は、二点にわたる疑問を提出している。「ひとつは、ピアジェのこの全体的理論が、子どもの個々の具体相を十分に捉えているかどうか。もうひとつは、適応という概念が、そもそも子どもの、あるいは人間の全体を捉えるのにふさわしいものかどうか」（116頁）と述べて、それぞれについて検討している。

最初の点について、浜田は、ピアジェが環境と主体とを有機的に結びつけたことは一般的に言って正しいが、しかし、ここでの相互作用を同化とみなしたことで、なにかがスッポリ抜け落ちると述べている。

「ひとつは、同化と動機、あるいは、欲望に関わる問題である。生体が自らの構造にあわせて環境内のある部分を同化するのはよいとして、では主体はなぜ同化するのかという点である。ピアジェによってこの点は問題になりえない。」（118頁）

というのも、ピアジェのシエマは外界の刺激を全て同化するものとされていて、認識と情意の相補関係をみず、決定的なことは「ピアジェの適応理論は、皮肉にも不適応の問題を扱えない」（119頁）と浜田は批判している。さらに人間行動の全体性という観点から、次のように述べている。

「実際ピアジェにおいては、人がどのように行動するかを捉えることはできて、人がどうしてある行動を行い、ある行動を行わないのかを説明することができない。これではとても人間の行動にかかわる全体理論だとは言えない。」

（120頁）

そして、この点とかがわっているが、ピアジェは「成熟の事実」を入れる場所をもっていない、と浜田は指摘している。ついで浜田は、ピアジェが環境をどう捉えているか、ということの検討に移り、ピアジェが「対物的環境と対人的環境とを原理的に区別しない」（122頁）と批判している。

次に第二の点について、浜田は、人間の場合、適応よりも間接性ということの方にその独自性があるという対案を提出している。

「適応論でもって人間諸現象のなにほどこかを捉え得るのだろうかと思えてくる。むしろ人間においては、環境との間接性のゆえに適応の自由度が大きいという点にこそ、その本質的特徴があるのではないか。その自由度のゆえに、人間は膨大な生産力をもつ道具—機械系を作り出し、強大な法—国家体制を生み、遠大な観念—イデオロギー体系を無数に構築した。私たちの生活は、そうして自ら作り出したこの人間的所産によって与えられる一方で、同じそれによってがんじがらめに縛られている。個々人の直接的環境の範囲のなかでは、一定の幅内で適応していると言ってよかろうが、もう少し広い範囲の中でみると、人間の現象はもはや適応論の域を越えて、疎外の現実のなかに呪縛されていく。適応論は、結局、人間をとらえる試みのなかの一部をなすにすぎないと結論せざるをえないのではないか。」（127頁）

ピアジェが発生的認識論において念頭に置いたのは、今日の科学の到達した教会的思考、物理学的思考と、そこに到る個体発生の歩みであったし、またその情意発達論において念頭に置かれたものは民主主義社会をモデルとした自律的道德観をもつ対等な人間と、そこに到る個体発生の歩みであった、と浜田はピアジェ発達論の土俵を見極めた上で、「私自身にとって気が

かりなのは、そうした見事な均衡にいたった人間ではない。むしろそこから容易に踏み外してしまう不確かな人間のイメージであった」(129頁)と述べている。

科学知が盛りを過ぎ、むしろ人間の生活にと

## D. ワロンの情動論

### 第1章 ワロンの心理学観

#### 1) 浜田寿美男を手がかりに

浜田は、ピアジェが感覚的運動と表象とをともに認識論的な側面をもつ、ということで、認識的な活動という同一の系列に並べたことと対比して、ワロンの説について次のように紹介している。

「他方、ワロンは、表象的な認識の系列を感覚運動ではなく、むしろ姿勢・情動に関わる系の方向に求めている。外見上似ても似つかぬように見えるが、実は、両者の間には深い発生的なつながりがある。つまり、直接知覚に与えられた場面の状況にあわせ、直接自己に与えられた欲求の動きに応じて、その場に合った行動を行っていく系列(感覚運動的活動)とは別に、むしろある場面に触れて予期的に身構え、適わぬ状況の前で身体をふるわせて情動に駆られていく姿勢・情動の系を取り出して、これを人間的意識そして表象の根源としたのである。

一見奇妙なこの系列づけは、思いがけなく豊かな展望を私たちに与えてくれる。ピアジェのように、感覚運動という『個別場面への個体的適応』のなかに、意識・表象の根を見ようとするならば、意識・表象はもともと個別的なものでしかないことになる。とすれば、いったいどのようにしてこの個別的なものが共同性を得て他者と交わり得るものになるのか。このことがどうしても解きえないアポリアになってしまう。それに対して、姿勢・情動系に意識・表象の根を求めらるワロンの枠組では、姿勢・情動がも

ってそれを攪乱するものとしてあらわれている、という現代の現実をふまえ、浜田はこのようにして、ピアジェ発達論の相対化をめざしたのだった。

もと他者への伝染・交通性と深く関わるものだけに、意識・表象は、最初から共同的なものとして措定され、ピアジェ的なアポリアが最初から超えられているのである。」(浜田 164 頁)

この浜田の紹介を手がかりに、ワロンが主として情動について述べている『児童における性格の起源』(明治図書)から、ワロンの情動論を抜き出してみよう。実は、ワロンの著作は難解だと言われ、また訳書によっては悪訳もある、ということで、まともに読もうという気が起こらず、とりあえずは、浜田『ピアジェとワロン』からのワロン説の紹介で終わろうと考えていたのだが、いざ仕事にとりかかり、『児童における性格の起源』に目を通してみると、非常に明解な説が展開されていることがわかった。それで、この本からの引用にもとづいて、ワロン説の概要をまとめることにする。なお、哲学的思考になじめない読者は、この第1章を飛ばして、第2章に進んでほしい。哲学嫌いのせいで、ワロンの情動論への道が閉ざされてしまうことを恐れて、一言しておきたい。

#### 2) 社会的なものへの把握

ワロンの心理学観は、社会的なものをどう捉えるか、という点で際立っていて、それまでの心理学が、個人を対象にしているのに対し、「人と社会との不可分の統一」という見地から、次のように述べている。

「社会は人間にとって必然的なものであり、有機的な関連をもった実在である。社会が人間の

生理機構の中に始めからすっきり組み立てられているというのではない。使用されている言語の何らかのシステムが学習以前に言語領野に組織されているのでもない。作用は逆方向に行われる。社会の方から個人の規定を与えるのである。社会からの諸規定は、個人にとって必要な補体なのである。個人の方もまた平衡に向かう系として社会に向かうのである。個人なしにはどんな社会もあり得ないこと、とくに人間社会は、人間とその心理、生理的な性質なしにはあり得ないこと、これをわざわざ付け加えることは明らかに不必要である。これは問題の一つの方向であるが、心理学者は、まさにその個人を研究の対象とするので、その方向を役立てるすべもないのである。」(『児童における性格の起源』9頁)

人と社会との不可分の統一について、ワロンは、個人に対する社会からの諸規定と個人の側からの社会への向かい合いと捉えている。この相互作用について、ワロンは、先の引用の前の文章で具体例を上げている。

「種は成長した形態の中のみその存在理由を見出すばかりではなく、子どもは平衡に向かう系としておとなに向かっているものである。またしばしば行われているように、個人を社会から分離し対立させることは、その人の脳から皮質を切り離すことにひとしい。なぜならば、大脳半球の発達と形状とが、人間を他の類縁の動物から区別するもっとも確実なものとなったのは、言語領野のごとき皮質領域の発現によるのであり、その領野が社会の存在を意味するのは、ある種族に肺があることが大気存在を意味するのと同じだからである。」(9頁)

ワロンは子どもを、大人という発達の極としての平衡状態に向かうシステムと捉えている。そして、その発達を、人間の器官の生理的機能が、社会と個人との相互作用によって形成されていく、という観点からあとづけようとしている。発達についてのこのような考え方は、従来の発達論が陥りがちであった機械論や目的論への批判を不可避とする。

「人間の発達の諸事実には、また同時に生命現

象の中には、たしかにあるむずかしさが介入しているのは本当である。それは生命や人間の発達に固有ではないかも知れないが、それらにもっとも明瞭にあらわれるものである。それは平衡状態(人間なら成人の状態)に到る諸段階が長いことである。これらが高速撮影的に見えるので、一つ一つ細かくはっきり区別される瞬間、ないし現実として区分されがちである。それらの段階は、静的な状態ないし期間の並列とみるほかなくなる。それらの事実にとって、その存在期間や時間は外的なものにとどまる。時間は抽象的なものとなり、絶対時間となり、事物の解明とは現実的な関係をもたない外界のものにすぎなくなる。」(10頁)

ワロンは、人間の発達が約15年という長い年月を要し、しかも器官的にも生理的にも思考のうえでも段階的な発展が見られることから、段階的な区分でもって発達の様式を捉えることになりがちであるが、このような捉え方は、発達にとって本質的な時間を生きたものとしてではなく、抽象的、外的なものとしてしまうのみなしている。そして、このような認識の誤りについて先の引用に続けて次のように述べている。

「目的因とは多分、このような絶対時間をこしらえたむくいであり、絶対時間がこんどは、静的には説明できないものを説明する役を与えられているのである。その説明の仕方も独裁的で絶対的である。なぜなら事物の説明となる他の要因とは共通の尺度を持たないからである。機械論と目的性との対立は、そこで、われわれの認識の体系において、思惟が、多様変幻の事物を手探りするさいに、表象や静的観念の中に固定できるものと時間とを切り離してしまった結果にすぎない。成りつつある事物が成から切り離され、成ることのかわりに単なる継起がとってかわった。そのかわりに成はそれ自身で存在し、それが自分だけで成立し得るかのようになり、ということは結局事物を生成し得るかのようになり、実在と認識とのアンチノミーである。常にこの錯誤によって思惟は、自らの手続き上の手落ちを事物の本性に転嫁してきた。しかしその手続きは、それと、知識が必然的に要

求するところの不一致が発生することによって常にすてることができる。これは今物理学が、その原理の改新を通じてまさに示しつつある実例である。」(10頁)

ワロンは機械論でも目的因でも、実在と認識とを切断してしまう、ということに注意を促しながら、実在の成りつつある事物と認識との関係を、その不一致が生じた場合、認識の体系の方を捨てざるべきであると提言している。

### 3) 子供の思考

ワロンは子供の思考について捉えようとするとき、真理とは明瞭であって、直観によって一度に認識される、といった考え方は間違いであると、し、「子どもの思考に興味ある点は、考えの内容よりもむしろ、おとなの思惟でならば絶縁しておける諸観念、あるいはいろいろ考えたことの中に融合を起こしてしまうことである」(23頁)と述べている。このように考えるワロンにとって重要なのは、思考の統一よりも、思考の分化である。

「児童の思考がしだいに成し遂げて行かなければならないところの進歩とは、思考があるはつきり分化した心的平面となって、具体的経験と認識が、それに重ねる表象や象徴の何らかの体系との間のすべての分離がそれによって可能となる、そういう形の進歩である。思考を象徴をもって配置した平面において働かせ、その平面をもって実際の感覚印象の平面に代え、それを

一種の理念的、仮象的な世界として対置するところの移転作用ができないうちは、児童は現象を統一したり客観化したり説明したりするのに必要な関係把握ができないのである。」(22頁)

ワロンはこのように自らの研究の方法について述べているが、今回は、ワロンの身体論や自我論にまで言及せず、独自の情動論を紹介するに止めておく。ワロンの情動論の意義については、次の事情とかがわっている。

「知能の働きが、直接的経験とか、直接的具体的な機転とかの水準を超えたものであり得るためには、言語や、それから派生するいろいろのシンボルの体系という、本来社会的な起源をもつものが必要である。個人の外に存在し、集団の遺産であるところの知識や観念の獲得あるいは展開、これが知的発達目標となる。したがって、この遺産の相続が、集団から個人へ、何かそのままじかに行われることも、はじめから不可能とはいききれないかも知れない。」(21~22頁)

ピアジェは、遺産の相続を集団から個人へそのままじかに行われると考えたのだが、ワロンはそれを否定し、この相続を媒介するものを情動と捉えた。極めて興味深いワロンの説に内在しよう。

て栄養機能は、乳児において少なくとも睡眠に匹敵する地位を持っている。新生児が乳を飲むときの、唇、舌、口蓋膜、咽のきちんと整った動作の遂行と、手足がそれに反して不規則な運動をする様子とははなはだ対照的である。」(38頁)

「唇は乳房に形を合わせ、舌と口蓋は入ってくる乳に適合し、乳が喉頭に達した時はじめて嚥下が起こる。液体の進行に応じて次々に閉じて

いくこれら緊張の連続は、食道や腸の蠕動にあらゆる点で似ている。ただ消化器官の尖端の部分にふさわしくより分化しているにすぎない。これらが生まれる時から内蔵の動きと同様に完成していることはけだし当然である。」(39頁)

ワロンが自動作用と名づけたものは、このような新生児に生まれつき備わった運動であり、これに対して、その他の作用はまだ全然発達していない。だから「幼児の行動の中で消化管の活動が、いわば中心的な場所を占めている。」(40頁)ということになる。そして、ワロンは、この自動作用が新生児の情動と結びついていくことに注目している。

「もっとも興味深いことは、消化管が色々な仕方での心的表出に、殊に情動に、関係するということである。消化管の緊張、分泌、感覚の種々の反応が、それぞれ各種の情動に関係するというだけでなく、同じ一つの情動の色々な質や効果が、もっとも個人個人に特有な消化器の反応の仕方に依存していることがありえるのである。かくて段階を経つつ身体的機能同志が相互関係網に入ってきて、各人がひとりだけで働かなくてはなるが、そのかわり皆が行動や気質に影響しはじめるのである。」(40~41頁)

ここの最後の文章は、記者が意味を取り違えたように思われる。「各人がひとりだけで働かなく」なる、というのは、人のことではなくて、身体の器官の個々の機能のことであり、これらが相互関係網を形成することで、単独での働きが消える代わりに、トータルで行動や気質に影響を与える、という意味だろう。それはともかく、消化管の活動が情動に関係することを指摘した上で、今度は、ワロンは、自動作用以外の要素に注目する。

「そこで新生児の状態は、外界と交渉する行動がまったく不可能なことで、一方、器官の活動がすでに十分出来ていてそれが行動を残らず支配していることとの対比を示しているのである。即ち新生児の空間的運動のごくただの運動の発散に似て、外的目標のないようなものがある一方、筋肉の緊張の完全な体系があって、それに

よって器官が形をとり、内容物でふくらんだり、出したり入れたり、また排出量を調整したりする上で一貫性をもった活動が見られるのである。感覚の働きは、外物の知覚を成立させることは出来ないのに、緊張の度合いは正確に感じている。それは、入れものとしての内臓器官の感覚は、その緊張と弛緩とに、つまり筋肉繊維の緊張に応じたものだからである。緊張の活動と緊張の感覚とは常に相互依存的である。」(43頁)

ワロンによれば、新生児は外界と交渉する行動がまったく不可能で目的なしの外的運動を発散させ、感覚の働きもまだ外部の知覚には到らないのに、消化管の働きは一貫性をもって、緊張と弛緩が繰り返され、それは情動と連動している。

### 2) 姿勢

このように自動運動と情動との結びつきを明らかにしたワロンは、次に「姿勢は静的緊張活動によるものだが、この点、まったく内臓の働きと同様である」(44頁)と述べている。ワロンによれば「姿勢というものはすべて、眠っている時でも目覚めている時でも、緊張の活動を、つまり筋肉に一定の堅さと形とを与える活動を表している」(36頁)のである。この姿勢の意義についてワロンは次のように述べている。

「姿勢というものが、表情だけでなく行動の方向づけにも重要であること、またそれがくりかえされて個人の型を決定する上で重要なものであることは、その統制のメカニズムを調べれば心的生活の諸要因にさかのぼることになる程のものである。」(46頁)

ワロンは、姿勢の統制のメカニズムについて具体的に述べているが、それについてはふれないでおこう。重要な事柄は、ワロンが自動作用とやがて幼児にあらわれてくる意志的活動との関係を対立拮抗関係と捉えている点である。

「よく言われることだが、未熟な時期から成人の時期までの間には、連続的に次第に完成していく過程があるだけで、機能ははじめからたど

## 第2章 ワロンの活動論

### 1) 自動作用

ワロンの発達論でのキーワードは、情動、姿勢、自動作用、表象作用、である。ワロンによれば、新生児はもっぱら自動作用に支配されている。

「新生児は、眠っていない時は、泣くのでなければ乳を吸っている。乳を吸うのでなければ消化の最中であり、またお腹が空けば泣く。かく

たどしかつたものが、次第に複雑で正確で性能のよいものになると考えられているし、たちまわりの敏捷さから知能が、自動作用から認識活動が、生じてくるかのように言われる。しかし新生児が行う始めの全身的痙攣的反應と、始めの定位的な反應とは、本来対立と拮抗関係をもつのである。そしてそのような拮抗関係は、それら外界と交渉する運動の規制と知能との間に、即ち自動的反應と意志的行動との間に、再び見出されるであろう。」(53頁)

ピアジェが新生児の自己中心的な感覺的運動から、直線的な發展段階を描いて知能の生成を説くことに対して、ワロンは、ピアジェの認めている外界との同化と調整をもたらす感覺的運動を自動作用に含め、意志的活動をそれに対立拮抗するものとして捉えている。そして、意識の生成に関して、その起源を感覺的運動に単線的に求めるのではなく、自動運動と意志的活動との双方の対立拮抗に求めようとしている。

### 3) 活動の捉え方

ワロンは、この双方の間の対立拮抗の場を、外界と交渉する活動の諸形態という見地から観察している。

「たいがいの動物では、生まれた時から食欲その他の必要に従って、色々の外的状況に反応できるような運動が生じる。アメーバー程の水準の生物などでは、体の変形が即ち移動でもある。元来背囊の状態なので、体を内容の上にしめつけることがただちに液体の中をおよぐことになる。そこで姿勢の活動と外界との交渉の活動は発生的に同じ起源を持っている。」(54頁)

ワロンは、アメーバーを例に引いて、自動作用にもとづく姿勢の活動は、同時に外界との交渉の活動でもあると見ている。

「自動作用はその程度や仕組みが何であれ、実は順応的活動以外のものではないのである。自動作用のどの表現も、常に環境の変化、また活動自身の変化に順応しているものでなければ不可能である。歩行にしても、絶えず足を地面の抵抗の変化に合わせて、平衡をとったりする順応の連続である。ここに歩くメカニズムの側と

歩かれる外界の側とを区別することは、まったく抽象的な区別である。」(55頁)

自動作用と外界との結びつきについて述べたワロンは、この事態に対して哲学的反省を行っている。「まったく抽象的な区別である」とみなしたことの根拠が、ひきつづいて展開されている。

「この区別は、多少もの見方から強いられたもので、限られた事物しか念頭におかないものだから、事物をその自然的なあり方からひきはなして区画してしまうとそうなるのである。静的な完成したものにとらえてしまうと、事物はその自らかかわる相関者と対立したものとならざるを得ない。生物とそれを構成している多様の可能性についても同様である。そのような見方をすれば生物も一つの自足的な系であり、機会あって自らの能力や内容を現すにすぎないものとなる。ところが実際には、生物体が組み立てられること自体が、その反応の相手である外界から説明されるのである。生物体と外界は相補的で、一つの連続的全体を成している。反応が生じるには環境と生物との両方に条件が必要である。そして場合により、どちらが重きをなすかは色々だが、どちらの側からも反応の原因が生じ得るのである。」(55頁)

ワロンによれば、歩行の際の歩く主体と歩かれる地面とを区別することは、「多少もの見方から強いられたもの」なのだ。これは多分カントの超越論的仮象論と同じことを述べていると思われる。つまり、人間が歩行を認識するときに、抽象的な区別を立てることでは認識できないのだが、しかし、思考は、この思考に由来する抽象的な区別が、實在に由来するかのよう思い込んでしまうのだ。

ワロンは、この思考の思い込みをとりはずして、實在を見ようとしている。そこで出てくる事態は、生物と環境とを双方とも反応の原因が生じるものと見なすことである。もちろん、双方の比重は色々であって「生物が進化するにつれ、活動の重心は環境よりも生物の方に移ってくる」(55頁)が、人間の場合でも、外界とのつながりが切れているわけではない。ワロンは、

ゲシュタルト心理学をひきあいに出して、次のように述べている。

「ドイツの心理学派、形態ないしゲシュタルト学派は、現実の環境が生物に生ぜしめる色々の行為が本質的に主体と環境との連続を保つことをよく示した。どの行為も、全体の状況、即ち常に内的外的状況から成り立つ全体に依存する所の、各々一種それ独自の構造をもっている。その内的および外的の両面に、ただ言葉の上すぎないにせよ、区別をたてることは人為的なのである。内的および外的状況は、それらが生み出した活動の中に解き難く融合している。その状況なるものは、なにか静的な条件が外界の側からにせよ主体の側からにせよ遭遇してそこで結びつくというのではけっしてなく、あるま

とまった全体であって、その中で内的と外的とがより分けられるものだからである。反応の中に入ってくる外的なものは、同時に主体のある傾向に対応し、それを引出すものである。逆に言えば、たまたまそこに發揮された生体のもっている傾向は、それが対象を呼び起こす力をもっていたからこそその対象に遭遇したものに他ならない。この回路を切断して、対象と主体、目的と手段、を分解してしまうと、本質的なことがわからなくなる。」(56頁)

ワロンの言うまとまった全体、これをどう捉えるかは、今日に到るも解決されていない課題だ。まさに「新しい思考」を定式化することが問われているだろう。

## 第3章 思考の起源

### 1) 自動作用と表象

ワロンは、自動作用がもたらす姿勢が外界との交渉の活動であり、なおかつ、この活動は生物と外界との全体であって、切り離して考えることは出来ないことを示した上で、ついで、この自動作用と表象によって働く精神活動との関係についての考察に移っている。誰でも経験することだが、階段を降りる場合、意識せずに自動作用の歩行活動で行われるが、これを足の上へ下げを意識して行なおうとすると、かえってひっくり返りそうになる。ワロンが自動作用と意志的活動の間に対立・拮抗関係を見るのは、この事実にもとづいている。

「したがって運動的適応や自動作用から表象によって働く精神活動が生じると考えることはノンセンスである。それらははっきり異なった別々の水準の活動であり、それらは人間においてしばしば見られるごとく、互いに矛盾しやすいのである。」(57頁)

このように自動作用と、表象によって働く精神活動とを全く異なった活動として区別したワロンは、人間の新生児が支配されている自動活

動がその後の成長の過程で、どのように意志的行動にとって代わられるか、というように問題をたて、次のように述べている。

「状況への直接的な適応であるところの自動作用なる完成されたものが、いかにして次第にこれが抑えられて、直接的状況よりむしろ今直接にはないものを理由とするとき活動にとってかわられるのだろうか。今じかにあるものとはごくちがったものに対応し得るのが表象なのである。そして次第に、今あるものよりも可能的、仮像的なものが行動を決定するようになる。人間は二面のうながしの間にある。一つは直接的感覺的な面であり、そこから直接的適応ないし把握が生じる。第二は、表象の座である大脳皮質、非現実的な理念的状況を形作るものである。人間の行為が次第に第一のものに支配されるのをやめ、第二の支配に入ってきたのは、後者の方が適応と征服とのはるかには有効な手段を提供するものだからにちがいない。」(58頁)

ワロンは、自動活動と意志的活動とを本質的に別のもつと見なして区別し、そして人間が成長することで前者の支配から後者の支配へと移っていく、と述べたが、どうしてそんなことが

起き得るのか。この問題を解く鍵をワロンは、自動作用がもたらす情動に求めた。

「環境に対して上手に対処するには、ただやってみるより頭を使った方がよいわけである。思考は直観よりも多くの現実を含み、より客観的である。しかし思考は、実に長い一見矛盾に満ちた段階を通過して発達した極限のものである。とくに原始的思惟について我々が知る所では、それは物理的実在の法則とは少しも適合しているとも見えないのであるから。それでも思考が出来上がってくるまでのどの段階においても、人間の現実の利害に対立しないどころかそれに沿ってきたはずなのである。この不思議な変遷を考えれば、思考が現在では世界に対して理念的で同時に客観的な認識をするものなのに、その起源が、人間をもっとも自己自身にとじこめる働き、つまり姿勢をとる働きにあるということが、さして不思議とは見えなくなるだろう。実にこの姿勢活動から、最初の主観的また、意識的直観の努力が発生してきたのであり、姿勢活動とその本質的に形成的な(可塑的な)特性なしにはそのことは不可能だったのである。この生得的な感覚が、どのような新たなる活動や順応の回路において貢献するようになるか、これは情動の事実の中において示すべきなのである。」(58~9頁)

ここでワロンは、今日の思考が世界に対して理念的でかつ客観的な認識をもたらすものとなっているけれども、過去にあってはそうではなかったという事実もあり、従って、今日の思考とは全く別の姿勢をとる働きによる外界と生物との結びつきが、思考の起源であるとみなしても不思議ではない、と主張している。そして、この姿勢という最初の結びつきが思考へと到る鍵が、情動にある、というのだ。

## 2) 情動そのもの

情動について、ワロンは、まず二つの立場を紹介することから論を起している。「情動とは適応行為をみだすもので、本質的に活動の退化したもの、生物の活動のなかで病的なものなのか、あるいは情動は適応行為の中に存在理由

をもつものなのかと言うことである。」(60頁) というように整理した上で、研究者たちの色々な情動論に検討が加えられている。

後者の立場に立つワロンは、ピエロンの説によりながら、「内臓の、あるいは身体の姿勢と機能を情動との間に、根本的な類縁関係を認めること」(65頁) が出来ると主張している。そして「情動のもっとも明瞭に結びついた効果は、交渉活動やその中枢に発するのでなく、身体の緊張、即ちシュリントンの言うように内臓の働きを含めての身体の緊張、姿勢の活動の方面に基づくことは、ある原始的な反応によって明らかに示される。」(66頁) とし、子どものくすぐりについて考察している。

その上でワロンは、情動を生理学的に検討し、次のように述べている。

「情動において生じる色々な機能的な表出を生理学的に調べてみると、ここに情動の身体構造上の問題が生じる。それらの表出の各々が、単にその起源や性質が以ているというだけであるならば、あるいはむしろ、それらの近親からしてある特別な形体の行動が形造られているとなれば、それらには解剖学的にも示し得るような特別な神経中枢があるはずだということになる。」(73頁)

ワロンはこのような生理学的な探求は、大脳領野局在説によるものではなく、「神経系が複雑化してきた過程の中に、今日の種の行動に現われてきたところの機能の組織化の発展を見出す」という方法を示している。この方法について、ワロンは詳述している。

「色々な中枢が次第に出来てきてヒエラルシーを成すことを調べれば、ある機能が先行のものとして無関係に重なり合っているのではなく、互いに依存しあっているのがわかる。なぜなら新しい段階の行動形式は、その起源を以前あったものの能力の中にもつ他なく、したがって以前の反応を用いてそれを新しい形に組織することによって成り立つ他ないからである。このことによって新しい形式の行動は、以前の諸反応に新しい独自の方向を与え、新しい関連に応じた反応を抑え、ある反応を引き起こして、

それらの反応の表出をみずからが代わって行うようになる。それとともに新しい行動形式は、以前の活動形式と競合の状態に入り、以前のものの地位を奪ってしまうに到らない場合は妥協ないし相互影響が生じ、一方は他方との関連において見なければならなくなる。」(73~4頁)

このような見地から、ワロンは、子どもの神経系、及び大脳の発達を、活動が情動から知覚の支配の下に移る時期について検討した上で、解剖学的に見た情動の中枢について示しているが、これについては紹介をひかえておこう。とまれ、この中枢の確定にもとづいて、ワロンは情動についてまとめている。

「情動が子どもの行動の中で占める位置、おとなも受けるその影響、それはただの偶然的な失

## 第4章 情動の媒介作用

### 1) 情動と他の活動との関係

ワロンにとって情動とは、新生児の活動を支配していた自動作用が、成長の過程で知覚の支配にとって代わられる時の移行のメカニズムを説明するものとして捉えられていた。情動それ自体の考察の後に、ワロンは、いよいよ、この本題に立ち向かう。その際、次のように問題が提起されている。

「情動が一つの組織された反応体系であり、その発現を支配する中枢を神経系の中にもつものであることを認めれば、種族にとっての情動の役割とか少なくとも今までどのような役割をもっていたかが問題になる。生きものの、現在、または過去の、生存条件と体の機能や構造の間が全然不協和だとは考えられないからである。しかし人間では、情動は外界と有効に交渉するための二つの活動と対立を起すようである。つまり、一つは適切な運動や移動を行って状況に適応する活動であり、もう一つは外界を表象する活動である。これら二つに対立するということは外面的な矛盾にすぎないのだろうか。あるいは適応の第三の形の中に情動の存在理由を

調ではない。それはたしかに生体の中に組織されたもの、あるいは存在理由をもったものなのである。情動の発達の時期は中枢神経系の発達段階に対応している。それが人間の行動において今も特別の役割をもっていることは、その中枢が比較的独立で自律的であることによって示されると思われる。」(76頁)

ワロンはこのように情動のもつ自律性と、人間の行動における特別の役割をもつものとみなしたが、次に、この特別の役割に移っている。実はこの点についての考察が、ワロンの情動論の中軸をなしている。

求めなければならないのだろうか。」(77頁)

ワロンはここで、戦争中の恐怖体験などを素材にして、人間の情動について考察している。そして、先の引用文で提起している情動が自動作用、及び表象活動と対立する様を描き出している。全体の要約は必要ないと思われるので、ワロンが箇条でまとめている情動と、他の二つの活動についての関係についての叙述を引用してみよう。

まず、情動と自動作用との関係について。

「情動は自動作用と混ざり合うどころではなく、むしろ、自動作用におおいつくされるか、さもなければ自動作用の出現を阻止する。また少しでも情動が出てくるような状況が生じれば自動作用も途中で止まる。」(79頁)

これは戦線での兵士が抱く恐怖が、二つの全く反対の結果(一つは虚脱状態、もう一つは衝動行動)を生じることにともづいての結論である。

次に情動と表象との関係について。

「情動がもたらした表象は、また情動そのものを抑制し、情動に欠くことのできない臓器の表出作用を止めてしまう。… たしかに情動は表

象への扉を開けるが、情動と表象とはまた、くすぐりと刺激についての正確な知識や予期との間にあるのと同様の非両立性があるのである。」(80頁)

「情動は実際、外部感覚や弁別感覚を消しつつ、表象の働きを損ないつつ成立するものである。」(80頁)

「情動が自動作用と表象の活動を押しさえてのみ発現するのだとすれば、逆に自動作用と表象がなかなかできないときには情動が襲ってくる。興奮のエネルギーは、すぐなにか運動か表象か思考かでもって交渉活動にとってかえられないと、おもむくところまったく内臓的、または姿勢活動的なものに内攻するほかない。」(81頁)

これらは、人がまったく怒りに身を任せているときには、知覚と知能をまったく失ってしまうことなど、人が情動に身をまかせているときの心理状態からの観察から結論づけられている。またワロンは、情動が運動や表象に対立的ではあるが、しかし、ある場合には、目的的な反応の効果を増進することがあることを認めている。

## 2) 情動による自動作用と

### 知的行為の橋渡し

個々のケースを考察した上で、ワロンは情動の全体的な把握に移っている。

「情動が支配している間は、情動の表出と、対応する外的状況との接触の仕方は、まったく別のものになる。情動を形造るところの身体的主観的な印象にとらえられると、自我と非自我との限界が消えてしまう。主観的気分からは独立な実在固有の特性を伝えてくるどころの客観的な印象を保つべく、主観的な印象を減殺することにおいてその限界は成立し得るものである。感覚が混沌とし、未分化になり、しかしまだそこに外界の影響が入り得る状態において、その外界の感覚は今やっていること全体に溶け込んでしまっ、一つ一つとしては見分けがなくなる。部分がはっきり分かれていない状態は混淆的と呼ばれてきた。知覚も思考の如く混淆的

あり得る。どちらにおいても、要素を分解できないことと主観性とが、客観的状況と対応できる表象を欠くことと情緒性とが、各々対をなしているところの原始的段階なのである。情動の感覚は本質的に混淆的である。これは関係するあらゆるものを解き難く融合させてしまい、情動の事象の中に持ち込まれたもっとも偶然的な状況が、その情動事象を代表するようになりがちであり、その偶然的なものが情動を何度も呼び起こすようになりがちである。」(84頁)

情動について、このようにまとめた上で、ワロンは、情動が条件反射のメカニズムにもとづいていることを指摘している。

「そこで情動と外的状況との間に成り立つ関係は、条件反射的なものである。外的状況のかくかくの刺激や表象によってしかじかの情動の表出がきまるのではなく、情動反応は、何かひとりでのように、未分化に全体的に生じてくる。外界に向かってその事象ごとに分化したあらわれをするのではなく、情動はきっかけが何であれ、全体が生じてしまい、緊張と内臓感覚の波の中に、実在の認識を埋没させてしまう。これは弁別的適応的な行為とは反対である。」(86頁)

このように情動についてまとめた上で、ワロンは次に決定的な一歩を踏み出す。それは情動が他の人に作用を及ぼすことである。

「しかしここに、もう一つ別の形の行為がたちあらわれる。それは他人に影響を与えようとする行為、ないし他人の心を通じて何かをしようとする行為であり、実にこれこそ、従来諸家が情動を物的環境に対する活動の必要に当てはめようとした試みよりも、はるかに完全に情動の説明を可能にするものなのである。情動には緊張や姿勢の反応がともなって、それが運動行為や自動作用をたすけるどころか、さまたげていることを常に考えなければならぬからである。情動はそれらとはまったく別のものである。」(88頁)

ワロンはすでに情動と自動作用との区別を、情動が神経系のなかに独自の中枢をもつことを示すことでなしとげていた。ここでは人間にと

つての情動の表出の独自の意味が、他の人に作用を及ぼす、という事実から導き出されている。

「これはつまり、姿勢の反応が行動の一系統を生じたもので、身体の刻々の姿勢や配置の調節からわかれて、個体同志の間で関係をもつことのために役立ってきたように思われる。そのようにして集団的努力や社会生活の成立を助け、これが心的生活の洗練を可能にした。これは一人きりの個体からは生じ得ないものである。そのことによって、情動は、純粋の自動作用と知的行為との橋わたしの役をつとめてきたのである。自動作用は環境の相次ぐ刺激の作用に支配されており、知能の方は表象や象徴によって、現在の具体的状況を超えた意図や手段をもった行動を可能にするものであるが、この間の橋わたしをしてきたのが情動なのである。」(89頁)

ピアジェが、ワロンの言う自動作用、ピアジェの言葉によれば感覚的運動段階から直線的に知能の発達を説いたのに対し、ワロンは自動作用と表象活動との間に本質的な区別をもうけ、そして第三の自律的なものである情動に他の人に作用を及ぼすことを認め、これを自動作用と表象活動との間の橋わたしとするものとみなしたのだった。

## 3) 社会形成力としての情動

ではこの橋わたしはどのようにしてなされるのだろうか。ワロンはそれを姿勢の活動が生み出す情動が感覚をともなうことに求め、そして、その感覚が共同的なものとなっていることに求めている。

「姿勢の活動がとくに情動を介して心的発達に役割を演じるようになる元来の理由は、姿勢緊張における収縮と感覚との間に密接な相互依存関係があるということである。収縮が生じるとたんにそれは感覚を生じ、その感覚によって収縮はまた刺激を受取る。その間には、表面刺激と反射との間のような間隔がない。収縮とその感覚とは密接に関連していて、二つは同時に起こり、互いの特性を規定し合う。」(90頁)

「活動と直観とがこのように結びついた二重性

は、情動において、とくに明らかである。情動を形造る姿勢反応は、情動に自分自身の姿をまのあたりに見せるものでもあるらしい。情動にはすべて一種のナルシズムが不可避的に本来的にもなっている。」(90頁)

ワロンは情動のとりことなっている人が、ある種の演出効果を感じていて、そこに一種の潜在的な意識があることを認めている。それはとりあえずは自分自身に働きかけている。だがそれは、直ちに他の人に作用をおよぼす。

「姿勢や表情活動と、そこから生じる感覚との、このような絶えざる相互作用が、互いに洗練し合い、色々の状況や気分特有の多様な表情をみがき上げ、またこれらの気分を感じる微妙な直観をとぎすまして行くが、それと同時にこの相互作用はこのもっとも主観的な反応のただ中において一種の二重化を行っており、その結果は皆、一つのもっとも重要な結果に集約する。即ち一方には表情そのものがあって、それは意識の対象となつては見る者に、自分がその表情をしたときにも他人の表情を目前に見たときでもほとんど同じ仕方で迫ってくるようになる。他方これら表情についての意識は、これは表情をしている当人のものでありながら、偶然いたのにせよ想像上のにせよ、これを見ているまったくの他人の意識と同一視されるに到るのである。」(91頁)

ワロンは子どもの発達という見地から、自分と他人の区別は徐々にしかできないので、幼児では周囲の人の感情を取り込んでいると見ている。だから、自分一人のときには恐れや痛みがあっても泣かないが、他人が見ているとなると泣き出してしまふ。こうして情動は伝染性と集団性をもっている。

「情動のこの伝染性と集団性とが、情動自体の進化にとってのみでなく、人間の歴史においても、人間が風習や儀式によって組織的に教化されるために、決定的に重要なものであったと考えなければならない。…

集団として生きることは、事実種族の歴史において一特異例たるに止まらず、それは進化の一段階である。それまでの段階では、活動の本

質は出合う状況にうちかつたため、よりよい自動作用を所有することであった。しかし集団はただの寄せ集めではなく協同作業の上に成り立つ。そこで生存の努力をしている個人個人を、はじめから状況の認識と、協同で解決すべき問題の認識とによって結合することなどできないので、まず各個人を一定の活動に向けて統一してしまわなければならない。この段階では、状況は個人の認識能力の範囲を超えているわけなので、活動は伝染的に同じ衝動で、条件反射により、以前活動に結びついてきた単純な合図によって発生することができなくてはならない。これらはまさにわれわれが見て来たとおりの情動の特性なのである。」(92~3頁)

ワロンによれば、人類の最初の社会は、情動をコミュニケーションとして活動を統一していた、ということになる。そして、幼児の場合、人類社会の進化という系統発生が、その個体発生の場合において繰り返されていると見るのだろう。この点についての成否を判断する材料を今の私は持っていない。最後に、自動作用と表象活動との橋わたしについてワロンが述べているところを紹介して、この研究ノートを締めくくろう。

「かくて情動が人類の行動の中に占める位置も

明らかであるし、それが神経系の中に相応の中枢をもち、組織された機能であることも明らかである。情動は、共同活動として成り立つ適応の一形体において役立ってきたのである。これは集団の構成に大きな力となってきたものであるが、それに対応して、情動はそのはじめから集団からの規定を受けてきた。」(93頁)

「集団についての考慮が、はじめ自然についての考慮よりも優先していたということは、まさに前者がすべての共同活動の不可欠の出発点であったということである。そして共同活動がなければ、知識も言語も象徴も不可能であった。さてそこで、儀式化した情動が、象徴作用の到来のために多分何かの役に立ったものとする、また集団的な心性や生活のもっとも決定的な表明を準備したものらしいとすると、それは自動作用と認識との必然的な仲介者でもあったことを認めなければならないのである。」(94頁)

ワロンは結論的に言って、人類の社会形成力として情動を捉え、その社会形成によって自動作用を土台にして認識能力や表象作用が発達する条件が与えられたという意味で、情動を自動作用と認識との媒介者であるとみている。ワロンの説の妥当性について研究するのは今後の課題としよう。

## 実践的地域通貨論 (第1回) //

### 西部忠さんのLETS研究によせて

#### はじめに

キョートレッツも2003年1月で発足3年目に入ります。この間、新しい入会者が増えていますが、地域でボランティア活動やサークル活動をしていて、自らの地域で地域通貨を使いたい、といった志向をもった人たちも参加してくるようになりました。また、地域通貨に関する本も色々出ていますが、それらに書かれ

ている内容について、LETS市で議論されたりもしています。それで、私自身のLETS像を、他の人たちのそれにコメントすることで示していく時期に来ていると判断し、作業をすることにしました。

最初にとりあげるのは、西部忠さんが『批評空間』22号に書いた「<地域通貨>LETS貨幣・信用を超えるメディア」です。これは恐らく日本で初めて発表されたLETSについて

の本格的な研究論文で、私もキョートレッツを始めるにあたって随分この論文のお世話になりました。それで、自身のLETS体験を踏まえて、西部論文への批判的コメントを行ってみました。

もちろん、西部論文は、コモックス・ヴァレー地域のLETSを具体的に取り上げて研究したもので、この地域のLETSについて調べたことのない私にとって、具体的な事実についての批判は不可能です。だから、西部論文に述べられている内容のうち、LETSの一般的イメージとして語られている部分にのみ異論を挟むことにしかありません。でも、いざLETSを始めようとしている人々にとって、西部論文はあまりにも完成されているので、ついそれを信じてしまいます。だから、私は、LETSを実践しようとするときに、西部論文をどのように読めばよいか、ということを書けることになるでしょう。

#### 会員制の新しいコミュニティー

「LETSは、コミュニティ内部の個人の価値——自由とそれにより生じる責任——に基礎を置くものである。LETSはそれゆえ『同意』『無利子』『共有』『情報公開』という四原則を持つ。」(『批評空間』22号29頁)

これは西部さんが与えたLETSの定義で、これ自体に誤りはないのですが、よく誤解されます。というのも、この表現だと、何か既成のコミュニティがあり、そのコミュニティ内部の個人の価値にもとづいて、LETSが始められる、というように読めてしまうからです。ここから、町内会であったり、地域であったり、自治体であったりといった既成のコミュニティをどのようにして活性化するか、とかいった発想でLETSを始めよう、ということになってしまいます。でもこのように考えて実践すると、多分うまくいかないでしょう。もし、うまく行くケースがあるとすれば、それは町おこしの他の種々の活動とセットになって地域通貨が導入される場合に限られると思います。

やってみてわかったのですが、LETSを起

ち上げると、LETSの会員がコミュニティを形成するのです。だから、それは既成のコミュニティではなく、新しいコミュニティが出現したことになります。西部さんもこの意味で述べているのですが、この意味での理解は十分なされていないとは言えません。LETSの会員がコミュニティを形成していると考えれば、このコミュニティは、いわゆる共同体のイメージとは随分異なるものとなります。共同体というとき必ず想起される様々な規制が、LETSコミュニティには存在しないからです。会員になったまま取引をせずに休眠していても別にかまわないのです。

そんなものが、コミュニティと言えるのか、という疑問が出るかも知れません。LETSは取引の場ですから、市場の機能を果たしています。市場はコミュニティではないから、LETSもコミュニティではない、という意見もあるでしょう。でも、LETSは市場を超えた会員制の取引のシステムで、それで労働交換をするわけですから、会員制といっても、単なるアンシテーションとは異なっています。やはり、コミュニティに分類する方が良いように思います。

#### 支払決済システムの進化形態

「LETSとは参加者が財・サービスを自発的に取引しあう自律的な経済ネットワークであり、各参加者が交換媒体として固有の地域通貨を発行・管理しながら利用する仕組みである。」(29頁)

この記述も、誤りとは言えませんが、誤解されます。それは、地域通貨を「発行・管理」と述べている部分です。私は、LETSを口座振替のための支払決済システムと捉えています。これは、「発行」という言葉になじむ銀行券よりも口座振替用の預金通貨に近いのです。銀行券も預金通貨も、ともに信用貨幣で、通貨に分類されます。そして、日常の取引では預金通貨による口座振替の方が銀行券での取引よりも圧倒的に多いのです。でも人々の眼前に出てくる銀行券の方が目立ちますので、岩井克人さんや加藤敏春さんが貨幣というとき、銀行券のこと

しか念頭においていません。それで、つい、地域通貨についても、個人が通貨を発行する、といったことを語ってしまうことになります。

現在キョートレッツでは、事務管理の手間を考えて、口座振替のツールを取引相手双方のサインが必要な通帳をやめて、購買者のサインだけの小切手に一本化しようとしています。たしかに、小切手を発行するところだけを見れば通貨を発行しているように見えます。実際に、銀行の口座からの支払を約束した現行の小切手は、信用貨幣であり、流通しています。でも、キョートレッツの小切手は、現行の小切手の進化したもので、LETSの口座振替の指図をするだけで、流通はしません。

あと、LETSコミュニティの支払決済システムを利用し、口座振替で財やサービスを交換したとき、はたして財やサービスは商品化されたのか、という問題があります。厳密にみれば、これは商品ではなく、従って、口座に記録されている数字や小切手は貨幣ではない、という原理上の問題もあります。西部さんがLETSを「対抗ガン」と見ることに私は賛成ですが、それが「対抗ガン」たりうる根拠は、この原理的な非商品性というところにあると考えています。とはいえ、現実に地域通貨という言葉が定着し、個人が通貨を発行するという考え方が広まっているなかで無理に言葉を変える必要はありませんが、通貨という言葉で、別のものがイメージされている、という観点は持つてほしいと思います。

### 貨幣・信用制度との対比

「そもそもLETSは貨幣制度なのか、それとも信用制度なのか？ もしそのどちらともいえないならば、LETSはどの点で、貨幣制度や信用制度と共通の特性をもつのか、また、それらと根本的に異なるいかなる特徴をもつのか？」(37頁)

西部さんはこのように問題をたてて、LETSとは何か、という根本問題を解明しようとしています。ところが今日の経済学の理論では、貨幣制度や信用制度についての通説は形成され

ておらず、経済学者各人各様のイメージがあるにすぎません。だから当然にも、西部さんは、西部さんなりの貨幣制度や信用制度のイメージでもってLETSとは何かについて論じていることとなります。

まず、二者間交換と三者間交換を、LETSモデルと貨幣制度の場合とを対比して詳細な試論が展開されているのですが、貨幣制度のイメージがあまり定かではありません。LETSモデルの場合、等価交換と一般的購買力という点では貨幣制度と共通ですが、債権債務関係が生じないという点では貨幣制度とは異なる、ということが述べられています。ここからは、西部さんの貨幣制度のイメージは、等価交換と一般的購買力と債権・債務関係の成立、といった内容でつきています。

やはり、商品からどのようにして貨幣が生成されるか、という見地から貨幣制度を捉えていかないと、貨幣による売買とLETSでの取引との違いは見えてこないように思います。私見によれば、貨幣の生成についてはマルクスが『資本論』で解明していて、私の解釈は、商品所有者たちが自分の商品の価値を貨幣商品金を素材として表示するという無意識のうちでの本能的共同行為を行うことで、商品金が貨幣に転化されたのでした。この共同行為とは、商品所有者が自らの商品を販売すべく市場で値付けをしたときに、その意図されざる裏面でなされているのです。だから、貨幣は一たん生成されると永続しているかのように見えますが、実は毎日の商品所有者の値付けの行為によって、都度生成させられているのです。

ところで、LETSでの取引は、会員制の閉じられたコミュニティでの取引、という点で市場での売買とは異なりますが、取引の尺度となっているのは法定通貨です。ところが取引を媒介するのに法定通貨は必要ではありません。キョートレッツの場合、貨幣は価値尺度として利用されていますが、交換手段としては利用されていない、ということになります。

次に信用制度とLETSとを比べて、西部さんは「資本主義経済における信用制度が法制度

に対する信託と個人に対する経済的信用を基盤としているのに対し、LETSは地域の倫理・慣習システムに対する信頼と個人に対する道徳的・倫理的な総合判断を基盤としている点で、根本的に異なる制度である」(43頁)と述べています。

信用制度が法制度に対する信託と個人に対する経済的信用を基盤としているという認識には異論があります。西部さんも認めているように、信用制度の基礎は貨幣の貸借にあります。その本性は貨幣の商品化であり、同じことですが、資本の商品化なんですね。そうすると、貨幣や資本(具体的には株式や債券ですが)を売買する市場が必要となります。この市場は金融市場として、銀行や取引所などの金融機関によって担われるのですが、信用制度には金融市場の形成とは別のもう一つの生成過程があり、それが貨幣取扱業から発展した商業銀行で、これは企業の口座を管理し貸付けを行い、支払決済システムを広げて預金通貨や銀行券などの信用貨幣を生んでいきます。

LETSとの対比で信用制度を論じようとするなら、信用制度が支払決済システムであるという認識をもつことが決定的です。余談ですが、従来各商業銀行は顧客の口座をいわば私有していましたが、全ての金融機関の支払決済システムが80年代末にオンラインで結ばれることで、各銀行が私有している口座は、その私有制の限界にまで社会化されてしまいました。今日問題となっているメガバンクの淘汰が現実性をもっているのも、この社会化に由来しています。

IT技術の発達による支払決済システムのオンライン化、これがさらに進み、口座の私有制から口座の共同管理へと行き着くであろう時点を先取りしたもの、LETSの口座振替システムはそのようなものではないでしょうか。

### LETSの意義

「互酬経済が、全体としての経済体系の再生産を保証するために個人の意思決定の自由を著しく制約するようなモデルであるとするれば、LETSは、互酬制を<理念>としてはいるが基本

的には市場原理の長所を継承する、個人の自由な意識決定を基礎に据えたモデルである。ここでは、経済主体は貨幣を通じて緩やかに結合されているにすぎず、各主体の行動は相対的に自律的である。」(50頁)

貨幣制度及び信用制度とLETSシステムとの対比を行った上で、最後に西部さんは、LETSを市場経済が普及する以前の原始社会の互酬交換と対比しています。そして、このように述べています。この記述それ自体に異議はないのですが、しかし、私は、互酬制と対比すること自体に、LETSについての誤解を生む要因が生じるように思います。

たしかに、LETSは過去の互酬制への高次復帰と見なせるのですが、LETSを継続していこう、という実践的立場からすれば、互酬制との比較はあまり意味がないのです。というのも互酬制の場合、人々はそうせざるを得なくてお互いに財を提供しあっているのです。この行為は原始社会の共同体の存続のための不可欠の条件だったわけですが、ところが、これからLETSで取引を始めようとする場合、取引の材料は意識的につくらない限り見当たらないのです。今日、市場経済に依拠しておけば生活できますから、よほど意識的にふるまわない限り、LETSでの取引は成立しない、という現状があるのです。

LETSを起ち上げて、取引がなかなか生じない、これが現実です。そんなものを何故始めるのか、という疑問が当然生じるでしょう。とりあえずのLETSの意味は、西部さんも強調しているように、地域の市場経済がグローバル化により衰退していくときのセーフティネットとして期待できる、ということと、「経済メディア」に「文化メディア」がのっかっている、という点にあるでしょう。そして、この「文化メディア」という機能は、例えば、LETS共同体に参加したメンバーがそこで賛同者を募って色々な事業を始める、といった方向性を含んでいます。

長期的に見れば、LETSが今日の信用制度が形成した支払決済システムの進化形態だ、と



いう点が大きな意義をもってくる、と私は考えているのですが、この進化形態が、現在の萌芽

の状態で発揮できる諸機能の開発がいま問われていると思います。

## 後記

今年の春までヘーゲルに捕りつかれていましたが、西研の本を読んで、突然、哲学離れが出来ました。その後取り組むべき思想的課題を求めて、しばらくさまよっていましたが、ミードを皮切りに、心理学の森に迷い込んでしまいました。ピアジェ、浜田寿美男、ワロンと読み進むうちに、この道は、迷い道ではなく正道であることが、だんだんわかってきました。正道なのに、通る人が少ないので道でなくなってしまうのですね。

考えてみれば、ヘーゲル以降の意識の哲学の辿った道は、一つはヴントの実験心理学をへて、ミードやピアジェやワロンによる意識の心理学解明へと到り、もう一つはフッサールの現象学に通じていたのですね。そして、私としては、マルクスが『資本論』を書いて以降も、商品の価値形態についての研究をせずに、意識や社会について論じようとしている現象学の哲学者たちには何の期待ももてず、文化知、つまり「新しい思考」の出発点をどこに定めるかで、結局近代科学知が生み出されつつある時の哲学者であるカントやヘーゲルに立ち帰らざるを得なかったのです。

カントの超越論的仮象論の再発見とヘーゲル弁証法の転倒を成し遂げたあとで、心理学の森に分け入ったことは、幸運でした。もしこれらの作業を成し遂げていなければ、すでにピアジェの林で道に迷っていたでしょう。逆に、ミードの『19世紀の思想運動』やピアジェの『哲学の知恵と幻想』といった、今日の心理学の専門家には一寸歯が立たないような書物が面白く読めましたし、これらの本のお陰で、ミードやピアジェの本来の研究についても理解が進みました。

ところでこれまでの心理学研究での最大の成果は、ワロンの情動論でした。ワロンについてはまだ、その発達論の四分の一くらいしか読めていないのですが、その残りの部分がどうであれ、情動論は「新しい思考」の出発点の一つたりえます。このあと、ギブソンのアフォーダンスに移る予定ですが、こちらの方は、現在のアメリカ心理学で学界を二分する勢力になっているようで、本も沢山出ています。

あとサポートセンターやLETSなどの新しい運動にかかわることを通して、その運動体験をもとに理論の再構成がやれるようになってきました。実証的地域通貨論はその最初の試みです。以降もこの分野の取組みに力を入れていきます。